

明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その2

明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その2



岩泉町

青紙とカバーの図は、「昭和44年度の岩泉町小本周辺の地図」(国土地理院発行の2万5千分の1地形図「小本」)、「田老盆山」を使用して作成された「地区画2012」(主催:地区画推進協議会)のパンフレットから加工したものです。



明日の岩泉へ

東日本大震災
岩泉町復興の記録

その2

被災地に咲く花

織笠清 熊谷貴里子 小成智子 佐々木悦子 佐々木一幸 三浦登紀子 和野浩也

はじめに 明日の岩泉へ その2

あの平成二十三年三月十一日を境に、私たちの平穏な生活は奪われ、住み慣れた街並み、美しい三陸海岸の海岸風景はあまりに無残な姿に變貌し、自然の猛威杳然と立ち尽くすしかすべがなく、自然に対して人間がいかにか無力であるか痛感いたしました。

しかし、先人たちが明治、昭和の天津波という大きな試練を乗り越えて、その都度復興を果たしてきたのと同じように、いま私たちが直面する大きな課題や試練も必ず乗り越えることができると信じ、これまで一日も早い復旧・復興のため、町民一丸となり全力で走り続けて参りました。

これまで国内外含め、数多くの心温まるご支援、ご協力を賜り、復興の歩みは少しずつ形に表れてきていますが、直面する課題はなお山積しております。

私たちはあの日、あの時を決して忘れず、また、これまでの歩みを心に留め、「明日が見える岩泉」のため、さらに歩みを進めていくことをお誓いするとともに、皆様から、なお一層のご理解とご協力をお願いしご挨拶いたします。

岩泉町長 伊達勝身



目次

はじめに 明日の岩泉へ その2

3

第1章 新しい生活の始まり 仮設住宅から恒久住宅へ

7

1 住宅・住宅地の復興方針

2 災害公営住宅森の越団地を選んで

3 小本で暮らし続けたい

第2章 新しいまちの始まり まちを支える人と産業

19

1 復興工事の進捗

2 小本の漁業の復興状況

3 岩泉町の医療

4 岩泉町の今後に向けた商工業

第3章 岩泉・小本のいま その2

33

座談会 12人のフォトグラファが語る

1 なぜフォトグラファに？

2 何を撮るか？ レンズの向こうに何を発見したか？

3 復興の進捗と「だれでもフォトグラファ」の今後は？

岩泉・小本のいま — その2

仮設の生活 — その後 / 仕事の風景 / 復興の進捗 /

集い / 美しい岩泉

撮影会

第4章 この一年の出来事 — 恒例行事の再開

冬 / 春 / 夏 / 秋

資料

- 1 災害公営住宅の建設
- 2 集団移転事業
- 3 漁港・堤防の整備、がれき置き場の状況
- 4 小本津波防災避難施設の建設
- 5 平成25年度の復旧・復興予算について
- 6 復興スケジュール

おわりに 明日の岩泉へ その2

50

90

101

113

122

第1章

新しい生活の始まり 仮設住宅から恒久住宅へ

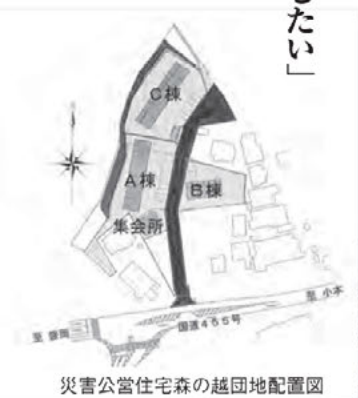
「津波に耐えた我が家を何とか直して住みたい」

「住み続けてきた元の家にできるだけ近い場所で
建て直したい」

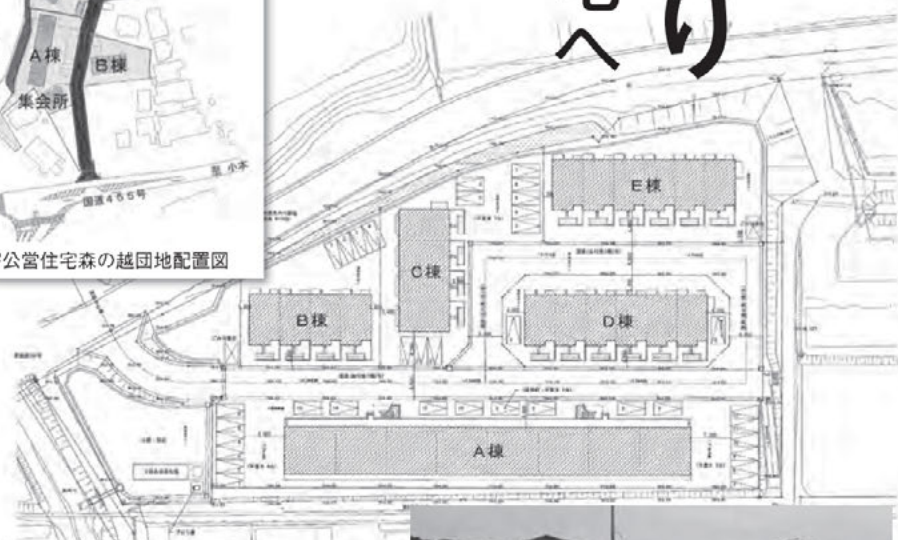
「災害公営住宅ができるなら入りたい」

「年を取ってからの生活に便利な場所にしたたい」

「家とともに生業を立て直したい」…
これからの暮らしへの思いがふくらむ



災害公営住宅森の越団地配置図



災害公営住宅小本団地配置図



完成間近のA棟、B棟

1 住宅・住宅地の復興方針

岩手県の方針

県は、平成25年1月に「岩手県住宅マスタープラン」を東日本大震災からの復興を見通して策定。住宅の復興について、28年度までを目標とし、特に災害公営住宅は25年度完成を目標としている。

また、希望する人が持ち家を取ることができるようにする支援と、持ち家を望まない人のための民間賃貸住宅の建設支援を掲げ、住まいに関する相談や情報提供、被災した住宅の改修や再建への支援をすることを示した。4月には「震災復興のための住宅モデルプラン」として9百万円〜2千万円程度の戸建住宅のモデル案も提示された。

岩泉町の方針

町では、国や県の施策を踏まえ策定した復興計画を基本とした上で、それぞれの住宅再建ニーズを受けとめ、岩泉字森の越と三陸鉄道小本駅西側に災害公営住宅を建設、駅西側と東側に移転新築用地を造成することとした。25年5月に町中心部の森の越に15戸が完成。小本駅西側には26年3月を完成予定として36戸の建設を進めている。

自力での戸建住宅建設のため、60戸分の宅地が26年度中に小本駅西側と東側に完成予定である。また、浸水地域の中でも、条件が整えば住宅再建を許可する。

選択は多彩な環境を有する岩泉



災害公営住宅森の越団地

町ならではのものとなっている。

2 災害公営住宅森の越団地を選んで

九十四歳、

日々健康に宇霊羅山を望む

—阿部孝四郎さん



私は小本地
区の中野に生
まれ育ち、炭
鉱などで働い

てから東京に出た。東京では昭和26年に給食の会社を台東区に起こし、足立区に工場を広げ、最大で一日7千食を出していた。昭和60年の筑波万博の後に仕事をやめ、平成9年に東京から戻って小本に住んでいて被災した。

震災の時は、町内の小川地区に松葉ジュースの配達に行ってい

て、小本に戻る途中でパトカーに止められ、危険だから引き返すように言われて助かった。その後、小本小大牛内分校に一晩いて、龍泉洞温泉ホテルに移り、仮設は岩泉仮設を選んだ。

以前から町の(株)岩泉産業開発の工場を貸してもらって、松葉のジュースを作り続けた。永年の愛好者も多いが、主にひとり暮らしのお年寄りを訪問して配っている。松葉ジュースは埼玉の浦和の植木屋さんに、松は体に良いということを教わって始めたもので、十何年やったが、25年の終わりでやめる予定である。後を継ぐ人も

いないし、儲からないから。

災害公営住宅には、一番に入居した。毎日5時に起床し、食事はご飯に味噌、つくだ煮、そして松葉ジュース。酒は飲まない。災害公営住宅は、オール電化で文化住宅である。住み心地は最高。なぜなら宇霊羅山がよく見えるからだ。



「宇霊羅山に沈む夕日を眺めるのが最高の楽しみだ」

ひとり暮らしには
とても便利なところ

——名郷根光子さん



私は母親が小
本の出身で、生
まれも育ちも小
本であり、80年

住んでいた。夫が24年前に他界してから一人で雑貨屋を営んでいたが、年を取ったらやめようと思っていた。自宅に住み続けようと家を改装し、風呂も横になって入れるようにしたが、改装して1年半で津波に遭ってしまった。2階に置いていて助かった物を家の解体前に取り出し知人の倉庫に預けた。夫が大切にしていた切手はボランティアの助けで東京の通信博物館で展示された。

震災の時は、トンネル横の避難

場所に避難し、その後、中島の公民館、町民会館に移り、体調が悪くなったため高齢者や体の弱い人と一緒に温泉ホテルに移った。畳に布団、風呂もあって助かった。

入居するのに岩泉仮設がいいと思ったのは、父親が岩泉地区に住んでいたことがあるので、近くに親戚や知り合いが多かったから。間取りは四畳半二間と台所で、2年居た。寒くて日当たりも悪く、床下や周りから冷えるので、畳を入れ、押し入れにすのこを置き、ガラスに断熱シートを貼って何とかしのいだ。

森の越住宅への入居はすぐに決めた。5月半ばに鍵を渡されたが、6月中に引越せばいいということだった。森の越住宅に引越すとなって、「早くできるとい

いなあ」と思っていた。森の越住宅への入居は、仮設でも近所の人たちと一緒に居たので心強かった。小本に居たときの友達だ。何でもみんなで相談する。夕方になると外に出てきて話をする。岩泉は買物も病院も郵便局、銀行も近い。仮設のときも近かったが、森の越住宅からはもっと近くで便利になった。役場までも10分あれば行ける。社会福祉協議会の人々が毎週2人やってきて、体調などを聞いてくれる。

仮設よりは少し広くなったがやはり家が小さいので窓が小さい。場所はいいが日当たりが良過ぎて、西日が強い。日中は東から、夕方は西日が射して暑い。カーテンを二重にしても熱が溜まるので、皆で相談してエアコンを入れた。こ

この棟の6世帯は裏に出口がないので、裏に物を置くと不便だ。

これから何をやるうかと
考えられるようになった



—箱石千鶴子さん

小本川の水門
の近くで造り酒屋
屋だった店を酒
屋として経営し

ており、夫の他界後も一人で店をやっていた。震災後に以前の小本のスケッチを分けてくれる人がいて、良く見たらうちの全景が描かれていたので記念に頂いた。

地震の時は電信柱や松が大きく揺れていた。津波が来るかもしれないという事で向かいの山に上がったが、何も持たず、ジャンパーだけを羽織って、家の鍵をかけて



いった。最初の黒い波が来て、あつという間に目の下を家が流れていくのが見えた。さらに上のお墓、神社と登って行って、茂師に行く旧道を通って逃げた。びっくりすると涙も出ない。みんな何も言わず、ただ黙々と上に逃げた。

避難所は、初めは町民会館の大広間に入り、1カ月位で龍泉洞温泉ホテルの1部屋に4人に入った。その頃鏡を見て、自分がこんなに痩せたのかと思った。出身が岩泉地区なので、岩泉の仮設に入った。娘の居る大阪、香川に避難してから戻って入居したので仮設に入った時期は遅い。避難所ではただ呆然

とし、仮設でも何もしないでいた。森の越住宅に来て、落ち着いて考えることができるようになった。そうすると、生活の不安、うちがない、店がない、やることがない、これからどうしよう、と憂鬱になることもある。何かやるにしても、新しいことをやるには年を取っている。趣味でも良いが、仕事がないかと思っている。

森の越住宅の部屋は抽選で決まった。家賃は収入に応じて決まり、駐車場代も必要だ。夜になると隣の音が聞こえる。裏に花壇があるので、青じそとトマトとブルーベリーを植えてみたが、あまりうまくいっていない。小本に住んでいた時は野菜を育てたりする必要を感じなかった。

あの津波はつくづくすごい。家

の土台もなくなり、池の跡が残っているくらいである。家が流されてなくなったことは、夫の兄弟にとつて、毎年帰っていた所がなくなったというショックが大きかったようだ。今でも跡地に行くと涙が出る。土地は役場が買い上げてくれるようだが、それで良いのだろうかとも思う。家を建てることはあまり考えられない。

元の家のすぐ隣に堤防ができる予定だが、復興はあまり実感できない。海辺には住みたくないと言いう人もいるが、今見に行くと本当に穏やかな海である。

子どもを中心に住まいの選択

——三浦 純さん

家族は、妻と長女（3歳）、長男（8か月）の4人家族。被災



前は元の小本支所の近くにあった実家で4世代で暮らしていた。震災の時、小本

にいた妻と家族はトンネル脇の避難所に避難した。1カ月前に地震があり、避難訓練で逃げたばかりだったのですぐに行動できた。地震の時、自分は町内の職場にいた。宮古に津波が来たと聞いて、帰宅するように言われ、摂待（せつたい）から通っている同僚と車で小本駅に行ったが通行止めにあつた。避難者がある中島公民館に行き、妻や他の家族と会うことができた。

当日の夜、小本地区の中島にいる親戚の家に移ったので、避難所生活は経験していない。被災後、

私の両親と祖母は中島の親戚の空家を借りて暮らしている。祖母は足が不自由で手押し車を使っている。狭い仮設ではとても暮らせないと思った。

仮設住宅に入らずに民間アパートに入ったのは、子どもが小さくて泣き声が迷惑になると思い、民間アパートの方が防音が良いだろうと思ったからである。自分は町中心部の自動車整備会社に小本から通っていたので、4月下旬に岩泉地区でアパートを探し、親世代とは別れて自立することになった。アパートの家賃は「みなし仮設」とされ無料になった。「みなし仮設」の期間は2年間だったので、ちょうど2年で森の越住宅に移ることができた。

みなし仮設にも役場から小本の

情報が入ったが、仮設に住んでいないと届かない情報もあり、集まりや個人の支援活動などは参加できなかつたこともある。岩泉仮設には知り合いもいたのでその人から聞いたりもした。

6月中旬に民間のアパートから森の越住宅に入居した。住み心地は「ものすごく快適！」。森の越住宅に決めたのは、長く住むことを考えてここが良いと思つたから。民間アパートはガスだったが、こちらはオール電化。引っ越しの際には、電化製品や家具などをそろえたが、役場から引っ越しの補助金が出た。家自体にまったく不満はない。

町中心部での暮らしは便利だ。妻は最初、知り合いもいなかったが、自分の仕事関係で知り合いも

できた。妻は就職活動中に第2子ができた。長女は3歳から保育園に入った。

大きい家具は盛岡市に買いに行くと。小本に居た時は宮古市に買いに行っていた。岩泉にいと大きい買い物は宮古市か盛岡市に分かれる。子どもの病院は、久慈市の小児科で日曜日にやっているところがあるのでそこに行く。岩泉の病院は小児科診療をやっていない時もあるので行っていない。同じ森の越住宅に住む名郷根光

3 小本で暮らし続けたい

土地を譲ってもらい家を建てた

——箱石公治さん

(移転・新築)

小本下※に住んでいたので、津波

子さんは小さいころから知っている。森の越住宅の部屋を決める抽選の時に「名郷根のおばちゃん」に会えて嬉しかった。小本に比べて、岩泉地区は夏は暑くて、冬は寒い。

岩泉町は災害公営住宅ができるのが早かつたと思う。宮古市や山田町はまだできていない。森の越住宅に入居して、快適で落ち着けた。これからも東北の被災者の方々が不便なく暮らせるように、早く復興を進めてほしい。

が来た時、一瞬で家は流れた。家のすぐ裏の山に12〜13人の人が一緒に避難した。

津波をしっかりと見たのは、我々

*小本のまちの海に近い方のこと



だけではないかと思う。タクシー会社の3階が見えていて、あの建物はどこまで残るかなと思っていたが、一瞬のうちに流されてなくなっ

た。倉庫が流れていくのはかすかに見たように思うが、それ以外はすべて一瞬のことだった。

大昔の大津波の話を聞かされて育った。宮古市生まれの自分も17歳ごろのチリ津波、十勝沖地震のときの津波と今回と合わせて、3回の津波を経験している。妻は小生生まれで、実家は12代か13代続いている漁師。タクシー会社でも10年ほど働いた。

津波後は2晩を茂師生活改善センターに避難し、3日目にホテル愛山に入った。その後70歳未満は町民会館へ、というところで、夫婦とも町民会館へ移動し、次に龍泉洞温泉ホテルへと移り、10日くらいそこで過ごした。座布団3枚を敷いて寝るような状況だったが、ほかと比べたらまだ良いほうではなかったかと思う。

5月に小本仮設ができて、そこに引っ越した。家を建てて4年で津波に遭ってしまった。悔しいので、すぐ棟梁に「家を建てるぞ！」と宣言した。今住んでいるこの土地は親戚が持っていた土地である。家の建設資金は、地震保険と娘からの援助。町のアンケートでは公営住宅に申し込んでいたが、それはやめた。



自分はもともと漁師で、天然もののマツモ、ワカメ、ウニ、アワビなどを採る。養殖はやらなくてしまった。漁協の組合員は、180人位いた。その中で、船が助かったのは4人で、自分はその1人。サツパ船（小型の和船）だが、まさかさまに田んぼに落ちて、船外機が田んぼの泥に

埋まり、壊れなかった。良かった。良かったか悪かったかは解らない。船がなくなった組合員は新しい船に5年間「組合

船」として乗り、その後、払い下げてもらう。

復興は「進んだ」というよりは、「出発点に来た」という感じである。それでも、住宅はでき始めた。自分たちには「小本集落から中野集落へ」という変化がある。これに慣れるのは時間が必要だ。小本集落はまとまっていたが、バラバラになるので寂しい。家を建てたくても土地が見つからない人もいる。この新しい家の周辺は、小本に住んでいた人がほとんどである。

県が築造する「山付堤防」は、自分の家の敷地から始まる。氏神様がそこにいるので、「戻りたい」と思っていたが、敷地が二分されていくらも残らないので諦めた。津波が来るまで、買ひ物は（地元

商店の）山口屋さん、病院は宮古市で、と暮らしていた。今もそのとおり。車の運転ができなくても不自由ないようにと、駅の近くが良いと思っていた。

海の仕事は身体が続く限り、一生やっていきたいと思っている。夫婦二人で仲良くし、娘や孫がときどき遊びに来てくれて、曾孫もいる。11月には二人で、新巻づくり（加工）もやる。漁港も直ってきたが、集荷場が早く欲しい。

災害公営住宅で地域の人々と交流する日々を

——上下純一さん

（小本災害公営住宅入居予定）



小本のまちな真ん中あたりで酒屋を営み、商

店会の総務役をやっていた。震災の時は運送の仕事で盛岡市に行っていて、宮古市で津波からぎりぎりまで逃げて小本に戻ってきた。母は岩泉地区のデイサービスの施設に行っていて助かり、他の家族は、長女が宮古市田老の勤め先から戻って、車に乗せて逃げたために助かった。小本仮設では、自分と母と妻と下の娘の4人暮らし。隣に弟が単身入居している。仮設は結露がひどい。

小本の災害公営住宅に入る予定で、4人家族の住まいと弟の住まいを希望している。家を新しく建てるより、公営住宅にいられるうちは入ってほしいと思う。これからは、年金の問題、消費税の問題などがあり、楽しく暮らせるだろうかという不安もある。家賃や駐

車場代は自己負担である。公営住宅に引っ越したら、岩泉に嫁いでいる上の娘が子どもを預けて働きにいきたい（田老方面を希望）と言っているので、働き口が見つければ、子どもを預かるつもりである。

小本仮設入居者のうちの半分くらいは災害公営住宅にいくのではないだろうか。小本で自宅を直して住んでいる人の中からも何人か公営住宅に移ると聞いている。その他の人は新しく造成された移転宅地に家を建てる人と元の小本の土地に家を建てる人になるだろう。小本地区での家の再建は、25年8月から許可が出るようになって、現在は2軒程度だと思う。

三陸鉄道小本駅の駅舎を入れた複合ビルの建設はまだ着工してい

ないが、仮設の駅舎はできていない。商店は近くにいくつかできる。予定だが、商店会としてのまとまりがなくなっていくのが寂しいと思う。しかし、みんな小本に戻るので、あまり人口は減らないのではないか。小本は漁業を中心にして、商店会があり、岩泉地区より結束している感じだった。震災前は商店会ではイベントなどを主催していたが、現在の「岩泉町復興祈願おもと青空市」は町が先導しているイベントを商店会が手伝っている感じだ。

小本の災害公営住宅には集会所はないようだが、ひとり暮らしの人たちと交流を持つようにしたいと考えている。

何とか残った家を直したが：：

——金澤郁子さん

（自宅改修）



今の家は平成元年11月に、おじいさんが子どもの時に山に植

えた木を製材して建てた家である。津波は神棚の上のあたりまで来たが、間口が狭かったせいとか、ちようど家の周りを波が回ったよう、家の前や周りが他の家やがれきでいっぱいだったが、奇跡的に残った。

震災の時は、数日前からインフルエンザにかかっていたため、職場（グループホーム「あお空」）には行かず、自宅で寝ていてやっとな熱が下がった程度だった。宮古市に出かけていた夫が戻り、「逃

神棚に残った浸水の跡



げるぞ」と言われて、やっとの思いで車に乗り、家族で宮古市田老にある道の駅「たろう」の裏側の実家に逃げた。車で宮古方面に向かって行ったので、駄目だっただろうと思われるらしく、初めのうちは行方不明者リストに載っていたこともあった。実際には電気がなかっただけで、ストーブも水もあり、近くの防災センターでテレビも見られたので、津波の様子も分かったが連絡をする手段がなかった。

家が残ったので、何とかして住み続けたいと思い、地元の工務店に頼んで早い段階で直して

もらって、4月23日には何とか家で寝られるようになった。バスは通らなくなってしまう、小学校もなくなり、静か過ぎる位だ。うちよりもっと立派な家も流されてしまっただけで残念だ。最近、鳥の鳴き声が聞こえるので何かと思ったら、白鳥が家の前にたくさん来ていた。今までこんなことはなかった。小本の集落では目の前がれきの片付けが進んだり、堤防ができたりしているので復興してきている実感がある。岩泉町は広いが小本のことを忘れずに復興事業を進めてくれていると思う。小本は遠くに行く人はいないが、このあたり(もとの小本の町中)は寂しくなる。今はそれぞれ立場が違うが、早く皆が落ち着いて暮らせるようになると思う。

小本地区の住宅再建・まちづくりの復興事業推進に係る目標(工程表)

事業手法		工程	計画戸数等	H24年度	H25年度	H26年度	
面整備事業	漁業集落防災機能強化事業	用地買収					
		調査設計					
		造成1	60戸				
	供給戸数	民間住宅等用地	合計	60戸			60戸
		災害公営住宅	合計				
	合計		60戸			60戸	
災害公営住宅建設事業	災害公営住宅(小本駅西地区)		用地				
	事業主体	岩泉町	建築設計				
	計画戸数	36戸	造成				
	建て方	共同(5棟)	建設工事				
	構造	木造&非木造	入居				
	供給戸数		合計	36戸		36戸	
	災害公営住宅(森の越地区)		完成	15戸			

「記憶の街ワークショップ」 in 小本

被災前の小本のまちを模型で復元するプロジェクトがワークショップ形式で行われ（主催「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会）、それを記録した番組が、平成 25 年 12 月 6 日、7 日、NHK で岩手県内に放映され、12 月 7～9 日には小本生活改善センターでこの模型が展示された。

NHK は、被災地の町並みを模型で復元し記憶を聞き取っていくプロジェクトに密着。「シリーズ“ふるさととの記憶”」として、沿岸被災地 10 カ所を 2 月から順に放映している。「一瞬のうちに津波に飲み込まれ失われてしまった、あの美しいふるさと、懐かしい町並み。震災から丸 2 年、いま人々の記憶から、かつてのふるさととの情景は急速に失



われつつある。模型を前に、心の奥底に埋もれていたどんな記憶がよみがえるのか。人々がふるさとへの愛着や結びつきを取り戻していく過程をドキュメントする。(NHK のホームページから引用)



第2章

新しいまちの始まり

——まちを支える人と産業

震災から3年近くが過ぎた

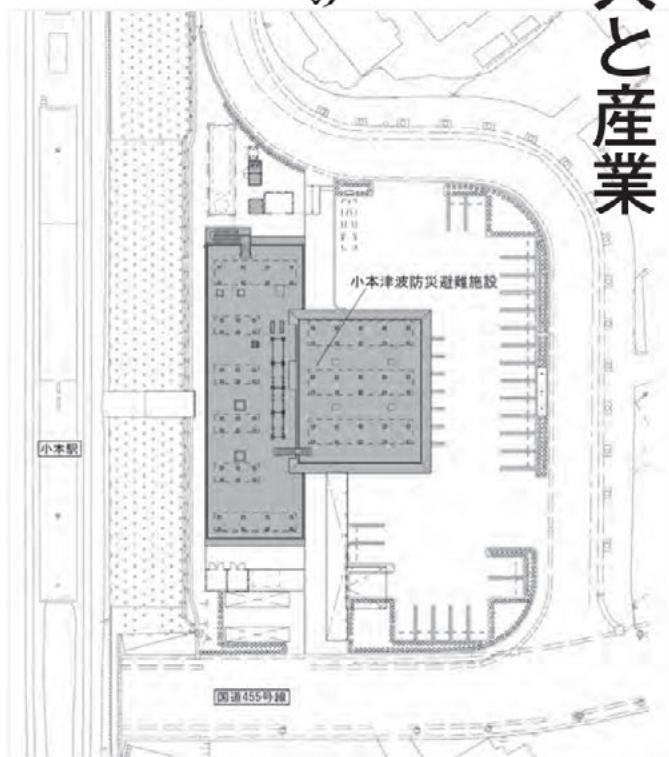
被災地域の復興状況

小本を特徴づける漁業をはじめ

医療、商工業、観光などについての

動きから

新しいまちの姿をみる



小本津波防災避難施設
完成予定配置図

1 復興工事の進捗

基盤整備工事

岩泉町内で唯一津波により被災した小本地区は、本州一の面積を持つ町の沿岸の一部であり、町を挙げて復興に取り組んでいる。

港湾の復旧工事は、茂師漁港と小本港が県の管轄で小本漁港が町の管轄である。町が担当する小本漁港は25年12月現在、導流堤工事の根本部分と消波ブロックの据付工事が残っている。水面下の浚渫工事もあるが、26年度中に完成予定である。堤防機能を持つ築山避難路は、26年9月には工事を終える見込みである。25年8月には浸水地域で住宅新築の許可を出した。25年12月現在、



避難路工事（平成25年12月撮影）



小本港の工事（平成25年12月撮影）

3軒が建築工事に取りかかっている。小本川右岸の山付堤防は25年6月に工事が始まり26年10月に完成予定。河川堤防のかさ上げは、右岸の小本大橋より下流は25年6月から始まり26年10月に完成を予定し、小本大橋より上流は26年度に発注予定、左岸は26年1月から始まり27年度に完成する予定である。

三陸沿岸道路（復興道路）は国の事業だが、用地買収は町が担当し、25年12月で完了した。現場は、新しい小中学校へ通じる道として立体交差するコンクリートの箱が姿を現すなど、早期完成を目指して工事が進んでいる。

住宅関連と建築物の発注

災害公営住宅に関しては、森の越地区の15戸にはすでに25年5月から入居しており、三陸鉄道小本駅西側の36戸も26年3月



宅地造成工事（平成25年12月撮影）



三陸沿岸道（平成25年12月撮影）

に完成予定で、26年度の早い時期に入居できる予定である。24年8月に行った「住まいに関する意向調査」で、概ねの意向確認をしており、25年11月開催の説明会に入居予定者として出席した人数からは、整備する戸数と大きなズレはないと思われる。

集団移転用地は三陸鉄道小本駅の西と東に計60区画を造成中で、表土を剥ぐ一次造成が間もなく終わり、26年度は区画道路、排水施設などを整備する。集団移転地の分譲価格は公共事業の買い上げと同様に土地の鑑定をした上での分譲を考えている。しかし、住宅再建に係る土地購入の負担があるためか、購入を希望するのは若い人が多い傾向にある。

三陸鉄道小本駅前の拠点複合施設ビルは設計を終え、25年9月に入札したが本体工事が入札不調に終わった。25年12月現在、設備工事、電気工事の業者が決まっても工事が始められない状況でいる。理由は鉄骨系の資材や労務単価に開きがあったためで、関係機関と調



小本駅仮駅舎 (平成25年12月撮影)

整の上、3度目の入札を行う。落札できれば、17カ月の工期で竣工する予定である。

小本小中学校の建設は、26年2月現在、文部科学省の災害査定を受けている。1、2階が小学校、3、4階が中学校という設計で、こども園は隣地に建築。複合施設は1階に駅舎、支所、観光インフォメーションが入り、2階には診療所、津波資料室、3階は非常時には避難所となる集会所、防災備蓄施設とし、自家発電装置、エレベーターも備える。

工事があちこちで始まって復興が目に見えるようになったが、「新しいまちの様子はなかなか具体的に見えてこない」という人もいる。元の集落の中心部が寂しくなって、震災前と変わってしまった日常生活に不安を持つ人も多いが、県内の他の被災地域と比して岩泉町は被災規模がそれほど大きくないこと、復興事業も進んでいることから、町外に転出する人は比較的少ない。町全体で支えることにより一



小本こども園(仮称)完成イメージ図

体感を持ち、今後の町の発展につなげる方向が見えてきている。被災者にとつての厳しい状況の全てを癒すことはできなくても、それぞれの想いを受け止める姿勢はできてきたが、新しいコミュニティの再編に向けた取り組みが課題である。

2 小本の漁業の復興状況

三陸沿岸地域として

小本は豊かな漁場である三陸海岸の北部、宮古と久慈の間に位置しており、沿岸漁業が中心である。水深40mくらいの海にある定置網は岩手県最大規模で、漁協の安定した大きな収益源となってきた。漁協定置網漁の19トンの漁船は4隻あり、被災時は整備中だった2隻が横倒しになったものの損傷は軽微で、沖に流された2隻も幸い発見され無事に戻って来たので、震災から2カ月後には漁を再開できている。

6月～8月のウニや11月～12月のアワビ解禁時

だけ、兼業的に漁業をする人たちの小規模な漁船も多くある。海の幸は小本にとつても岩泉町全体にとつても、地域を実感する特色である。漁業従事者世帯の集落に占める統計上の割合は、4割程度だが、もっと多くの人が身近に感じている産業である。

日本の水産物消費量は世界で一、二を争い、長寿の一因とも言われるが、産業としての漁業は衰退気味で、自給率は年々下がる状況にある。とはいえ、世界的には資源保護とのバランスをとった方策で成長産業としている国もあるので、これからの産業としての未来を切りひらく道を探すことは課題である。

漁業は農業とともに、人の暮らしに不可欠である。復興支援を糧にして産業としての漁業の再生に弾みをつけたい。地球規模の気候変動や、震災後に漁場である海の水温が上がるなどの変化があり、研究調査とも一体となったバックアップが必要になっていく。

小本の漁業の復興状況

小本漁港のかさ上げなどの基盤復旧工事は26年度

内の完成を目指しているが、漁港に船が係留できない状況にある間、小さい船は各自が軽トラックで自宅などに上げ、定置網漁船は茂師漁港に停泊している。漁船は被災前には269隻あったが、震災を機に漁業をやめる人もあり、復旧希望は183隻、うち180隻が24年末までに復旧し、漁船には国や県の補助が入っている。25年12月現在、船がないために漁業ができない人はいない。施設関係では、被災した作業場と保管施設、給油施設を25年度の補助事業で設計に着手、25年度内の完成を目指している。個人で養殖している組合員のワカメ乾燥場等は23年度に町と漁協の事業において完成し、必要な漁具も町と漁協で助成したので問題なく稼働している。給油は漁協のタンクローリーで代替中だが、その他の作業場や保管施設は完成まで不便している。事業は国、県、町の補助があるが、漁協も9分の1を負担しなければならないので、一気にはできない。これからに向けての復興という面では、消費に直結する形で農業に做った産直方式への検討をも視野に入れている。

定置網漁業が小本漁業の要

小本浜漁業協同組合 参事 金澤良彦さん



定置網ではサバ、イカ、サケ、マスが獲れる。震災時の停電で、ふ化場のサケの稚魚を通常より2カ月位早く放流せざるを得なかったため、戻ってくるこれからの時期を心配している。水温が上がったり海の変化があり、この先の予測ができない。

組合員は震災前の219人から186人に減少した。平均年齢

は60歳代後半だが、従業員には若い人がたくさんいる。昨年度は単年度赤字で積立金を取り崩し、今年度は定置網の業績次第で微妙なところにある。当組合はこれまでの業績が良かったので、会計処理上で赤字を埋めることができた。



定置網漁船

3 岩泉町の医療

小本の仮設診療所

小本地区では唯一の医療機関だった佐々木医院（佐々木トシ医師）が、震災の年の秋に閉院したため、24年の6月から仮設診療所が月2回開かれるようになった。町内では開業医のいない釜津田、大川、安家、有芸の4地区に社会福祉法人恩賜財団岩手県済生会岩泉病院（以下、済生会岩泉病院）から月2回移動診療所を運営（開放）していたが、小本地区もそこに加わり5地区となった。

同病院では、看護師、薬剤師、会計事務員を1つのチームとして派遣しているが、看護師と薬剤師は患者の様子が分かった方が良いことから、地区担当が決まっている。薬剤師は3人しかいないが、5カ所に月2回ずつ行っている。必要十分な薬をパツク詰めにしたセットも2つ用意している。

医師は岩手医科大学や県立中央病院、県立宮古病院などから来てもらっているが、不足がちなため、



医師不足に立ち向かう

県立宮古病院院長 佐藤元昭さん

岩泉町は面積が広く、盛岡市、久慈市、宮古市と3方面に向かう地域に分かれる。小本は宮古に来る人が多いようだ。私は消化器内科を専門としており、県立宮古病院も医師不足だが、済生会岩泉病院の院長とは旧知の間柄でもあり、菊地利夫副院長と交代で行くことにした。

仮設住宅の暮らしは大変そうで、仮設診療所では移手段のない高齢者等に向けて、慢性疾患の薬を処方することが多く、生活相談にも応じている。

県立宮古病院もこの10年、医師が減少していた。復興支援で37人までに回復したものの、まだ足りない。地域医療、災害医療を目指す人が増えてきたので、研修医を受け入れる努力をしている。診療所等の施設を造るにしても、まず医師の確保が重要だ。

盛岡市内の病院から県立久慈病院に行った帰りに寄ってもらったこともある。

仮設診療所の診察風景

原則として毎月第1、第3木曜日の午前中、小本仮設住宅集会所が仮設診療所となる。医師は県立宮古病院から、看護師の金澤幸江さんと薬剤師の立花等さん、会計事務員の3人は済生会岩泉病院から派遣されている。

仮設集会所の玄関を入ると、右手奥の部屋が診察室、左手の広い部屋が待合室兼会計所と薬局になり、和室では診察前の問診を行う。25年8月初めには、岩手医科大学5年生の女子学生が3人で研修に来ている。

患者は小本地区の仮設住宅に住む人が主で毎回10



人余りが訪れる。糖尿病や高血圧などの慢性疾患の場合が多い。待合室で看護師が血圧を測る。研修生が来た日は研修生がカルテを見ながら診察前に訴えを聞き取って医師につなぎ、診察にも同席して学ぶ。患者は診察が終わると会計を済ませ、処方された薬を受け取って帰宅する。

小本仮設住宅は約100戸だが、地区全体の人口は約1、800人なので、診療所には、仮設住宅以外の人がもつと診療に訪れることも期待できる。ちなみに人口800人余の大川地区には、釜津田と大川2カ所に診療所がある。安家地区の人口は700人弱、有芸地区は200人余。小本地区の高齢化率は35%で、岩泉地区と同程度

岩泉町の高齢化率

岩泉	34.7%
小川	42.8%
大川	45.0%
小本	35.2%
安家	49.9%
有芸	42.1%
町全町	38.5%



資料：住民基本台帳（平成25年11月30日現在）

であり、他地区よりは低い。

岩泉町の医療状況

岩手県には市立病院や町立病院が少ないために、小規模な県立病院が26施設あり、その数は他県に比べて多い。

地域医療は高度医療を基幹病院に任せ、一般的な病気に対応できるような体制を基本とし、予防医療や介護を含めたきめ細かな配慮が求められている。今後一層進む高齢化社会に向け、どのように対応していくか、地域医療の試行錯誤が続いている。岩泉町は人口減少、高齢化が全国でも進んでいる地域として、ここでの取り組みには多くの注目が集まる。

済生会岩泉病院は震災時には自家発電で対応。まちなかでは岩泉町役場と岩泉警察署とあわせて3カ所が、停電でも明るい場所だった。交通網が北は野田村、南は宮古市田老で遮断されたので、救急対応の拠点病院として通常の10倍の患者を受け入れ、在宅酸素療法の患者や、津波で低体温症となった2歳の子どもの処置もした。

済生会岩泉病院は従業員は約1000人、ほとんどが地元雇用である。施設介護の需要も増えているので、介護関連職員の雇用という面からも重要性を増している。

小本に再び医院を

済生会岩泉病院 看護師 金澤幸江さん



小本地区の佐々木医院で17年くらい看護師をしていた。閉鎖後に済生会岩泉病院から誘いを受けて続けることになった。佐々木医院は被災と院長の高齢に事務長の病気が重なって閉院を決意したようだ。

仮設診療所の様子は、開設から1年を過ぎて、患者さんたちから「畑に出られるようになった」、「眠れるようになった」という声を聞くので、元気になってきたように思う。

病院勤務は予約の確認などにパソコンの習得が必要で、何度もやめようと思ったくらい苦労した。小本地区は漁師の仕事柄が元気がよくて協力的だ。岩泉地区も都会の人と違って、ありのままで正直、素直でいい。



岩泉に四半世紀

済生会岩泉病院院長 柴野良博さん

済生会岩泉病院の常勤医は3人で、私が内科、副院長は外科だが高齢なので手術はしない。あと1人の若い医師も内科である。10年前には常勤医が7人もいて、在宅の訪問診療に努めたが、岩泉町は広いので1日に4～5軒しか回れない。今は家族で看ている家も減ったので在宅訪問の患者さんは5分の1だ。在宅医療では医師が月に1回、看護師が1回巡回する。常勤医は減っても、東北大学・岩手医科大学から小児外科、内科、眼科、整形外科、脳外科は定期的に来てもらっており、専門医療の応援体制ができています。平成元年に院長赴任当時は全科80点を目指したが、今は60点に目標値を下げても全科診療を可能にしたいと思っている。

若い医師はまず専門医療を学んで欲しいので、長く留まるようには言えない。地域医療とかプライマリーケア、総合医など言い方はいろいろだが、まだ確立途上だと思う。地域医療という面では保健・福祉分野との連携が必要になるが、院長として病院内部のほか、学校や警察の担当もあり、なかなか手が回らないのが現状だ。

岩泉町では医療費は高止まりで、脳卒中の発症率もほとんど変わっていない。血圧と肥満が課題だが、学校の養護教諭と話しても、なかなか親の理解が得られないと言う。

震災後、岩手県北部沿岸の子どものデータが悪くなっている。スクールバスで歩かなくなったことと、外遊びをしないのが原因だろう。お菓子と炭酸飲料も問題だが、親自身も肥満傾向で、その怖さを実感するのは年齢が行ってからなので、教育するのはなかなか難しい。

介護については在宅が家庭環境から難しくなり、施設介護の収容力を上げることに努めている。



4 岩泉町の今後に向けた商工業

商工業の復興状況

小本地区は集落の中心部が津波で失われ、かつて活発だった商店会も消滅した。仮設商店街7店舗のうち3店舗が近隣に本格的な店舗の再建を決めた。商店会の形成は現実的に対応せざるを得ない状況にある。まちづくりの方策次第ではあるが、少子高齢化の時代の先取りは簡単ではない。

県内で最も古い酪農の歴史を持つ岩泉町にとって、町内企業の岩泉乳業(株)の製品「岩泉ヨーグルト」のヒットは明るい話題である。同社は女子サッカーの日テレ・ベレーザ岩清水梓選手が滝沢市出身ということでチームのバックアップをしている。

25年4～9月にNHKの朝の連続テレビ小説で放送された「あまちゃん」が久慈市の海女と三陸鉄道を扱っていることから、久慈市を訪れる観光客が増え、その一部が龍泉洞に寄るという面もあるようだが、一過性にしない工夫がいる。龍泉洞

の入洞者は、震災前の年間20万人弱から23年度は半分以上減った。しかし25年は24年の増加に続き2割、3割と戻している。

JR岩泉線は、かつて鉄鋼業の物流機能があり、小本地区まで延伸して三陸鉄道につなげる計画だった。急峻な地形を通っていて、保線の費用は大変だったと推測される。22年7月に土砂崩れで休業していたが、25年11月、町民の切望にもかかわらず廃線が決定した。

岩泉うれいら商店街

岩泉町の人口1万人余のうちの半分近くを占める岩泉地区にある「うれいら商店街」は、平成10年頃までは大通り商店街と言っていた。国道455号線が整備されて商店街をバイパスするようになって人通りが減ってしまった。

商店街会長の八重樫康さんは次のように語る。

「仏具屋なので、震災時は県の全葬連の仕事で盛岡に1週間缶詰になったりして、他県の応援を頼む作業などで大変だった。商店街に活気があったのはバブル期で、以後、お客さんは減り続けている。観光

客の回復は商店街にはあまり影響せず、龍泉洞から人が流れて来ないので、復興の実感はない。

商店街の会員は私が会長になってからの15年の間に会員が50人近くから31人に減っている。高齢化による後継者難もある。活性化には若者の勢いのある判断が必要だと思う。岩泉には鉄や牛など、時代に合った光るものがあつたのだが、今はそうしたものを探しあぐねている。冠婚葬祭も地味になる都会の流れが押し寄せているので厳しい。新しいことへの期待としては、地盤の強さを活かした実験場が誘致できるといと思う。」

地酒龍泉八重桜の泉金酒造(株)の八重樫義一郎さんは9代目だが、酒造業となつてからは5代目で、か



うれいら通

うれいら商店会
八重樫会長



泉金酒造(株)外観



手仕事のよさを広く

岩泉達人工房 てどの蔵 工藤リセさん

岩泉弁で「てど」とは技術、技を持った人のこと。毎週土日、築150年の蔵で手仕事を実演してもらい、おしゃべりを楽しんでいる。販売は原則、制作者に8割渡し、場所提供などの手数料2割を頂く。町の活性化の一環で、7年前に県からうれいら商店会に補助金を受け、「達人工房」として始めた。初めころは、盛岡のイベントなどに参加して実演したりしたが、今はここだけで行っている。

機織り、陶芸、ワラ草履、木彫りなどのてどは楽しんでやっているようだが、高齢化のため、いつまで続くか心配だ。山里の暮らしの中からうまれた技を見つめ直し、次世代へとつなげればと願っている。



手仕事実演

つての繁栄を知る老舗の一つである。商工会と観光協会の会長を務める視野の広さを併せ持っている。

「藩政時代は砂鉄を原料とするたたら製鉄が盛んで、若い人が多かったので、酒の需要があり酒造場も数軒あった。原料となる水は良いのだが、昔はあまり米が採れず城外から仕入れていた。このあたりは明治10年頃に大火があつて、街並みはそれ以後に建造されたのがほとんどだ。八重樫芳令さんがカンティーナとして使っている蔵も古い酒蔵の造りだ。

震災を機に復旧より将来に向けて復興をと思ったのだが、補助査定は復旧支援に限定された形だ。年間20万人いた龍泉洞の有料入場者数は団体客の回復がまだだが、それでも町内に宿泊する3万人が1万円使えば3億円となり、波及効果を考えれば10億円となる産業なので、観光は大事だ。うれしいら商店街に個性的な個店がもう少し増えて、2時間くらい滞在できるようにしたい」という八重樫さんの話である。



蔵を改装した洋の味

カンティーナ 八重樫芳令さん



店名のカンティーナはイタリア語で「酒蔵」を意味する。築300年近い実家の酒蔵を改装したこの店で、以前は10年ほどイタリアレストランを経営していたが、平成23年から地元のそば粉を使ったガレットとピザなどの食事と、飲食の合間にショッピングを楽しめるように雑貨類を置いた店にしている。

平成7年から12年まで龍泉洞の出入り口の横で“LA FONTE”（イタリア語で「清い水の湧くところ」を意味する）というピザの店を経営していたこともある。

人口の少ないこの町で続けていくのはなかなか難しいところも多々あるが、岩泉に残っている人の楽しみの一つとなればと思っている。また、今後の町を思うと、活性化に何かよい方法があれば——と考える毎日である。

観光ガイドと温泉ホテル

23年2月に岩泉観光ガイド協会が設立された。18年に商工会で始めたタウンマネジメント組織事業に観光ガイドの話が出て、町の補助金も受けながら住民によるガイドを養成して協会の設立に至った。「まちなか達人」「早坂山野草達人」「海と語りの達人」「山歩き達人」の4部会に分かれており、「まちなか」はうれいら商店街、「山野草」は早坂高原、「海と語り」は小本、「山歩き」は宇霊羅山、毛無森、安家の里山を案内する。震災後は海と語りの「モシ竜口マンクルーズ」に被災体験のガイドも組み込むようになった。

被災地ガイドは4〜5人、「そろそろ被災地の名称は返上したい」という意見も出ている。どういうコースを歩くかは、ガイドする人たちが自ら考え、実際の反応を見て修正する形をとっている。

バスの車窓から景色を見るだけでなく、その地域の息吹を印象づけるには、地元ガイドの話が大きく影響する。岩泉の資源としても、豊かな自然とそこに住む人の温もりが貴重なので、それを心に焼き付

観光ガイドは人気

岩泉商工会 事務局長 畠山和英さん
主任 和山欣彦さん



ガイドの会員登録をしているのは50人弱だが、実質的に動けるのは20人弱だ。男女比は6対4から半々で、60歳代が多い。ガイドについては研修の必要があり、他地域の視察や勉強会などをしており、概ね好評だ。

観光客は全国から来るが、早坂山野草は県内のお客さんが多い。被災地ガイドは遠くからもいるが、東北が多く、学校教育の一環の場合もある。早坂山野草とモシ竜口マンクルーズの知名度が上がっているので、まちなかや山歩きの宣伝もしていきたいと思っている。

被災地ガイドを実際に始められたのは24年度からで、陸のコースは県営小本川水門から旧岩泉町立小本小学校の1時間、化石まで歩くのもある。



けてもらえるか、ガイドの役割は大きく、その養成は重要である。

龍泉洞温泉ホテルは町などの出資による第三セクターの(株)岩泉総合観光が運営しているが、22年に累積赤字による経営悪化で社長を公募した。応じたのが現社長小松伸次さんで、福島県須賀川市の出身で、東北各地でも多くの仕事をしてくれている。

小松さんは、「再建を託されたとき、赤字があったが、震災のあった翌年から3年間、何とか黒字経営を続けている。ホテル経営はスタッフ教育が大事なので、力を入れている。昨年は地元の新卒を3人、今年は1人採用した。プロ意識を持って、サービス技能士という国家資格に挑戦しよう育成したい。

建物は築40年になり、設備のいいビジネスホテルが近隣都市にいろいろできてきて、競争は厳しいが、日帰り温泉サービスにバスを出すなど、利益は出なくても努力している。震災は就任の翌年だったが、避難所としての受け入れを決断した。

よそ者の想いかもしれないが、



ホテルマンとして観光へ提言するならば、それなりの店ができれば人は集まるので、小本に地元商品を取り入れた八戸の八食センターのようなものを造ったらいいと思う」という。

観光の今後に向けて

岩泉町では県下で唯一、早坂高原が森林セラピーロードに指定されている。広域では三陸ジオパークとして八戸から気仙沼までの三陸海岸一帯が25年10月、日本ジオパークに認定された。保全と教育だけでなく、地質遺産として観光にも寄与する期待がある。環境省の三陸復興国立公園指定も広域での観光客誘致に効果的だろう。これまでのような自然環境の保全だけでなく、復興につながる開発も認めるので、みちのく潮風トレイル遊歩道整備には期待が持てる。周辺地域や国とも協力しながら、岩泉町の産業として観光を発展させたい。



龍泉洞温泉ホテル

*森林セラピー実行委員会認定の散策路。専門家による科学的効果の検証がなされて認定される。

**環境省が進める東北地方太平洋沿岸地域に整備するトレイルコース。

第3章

岩泉・小本のいま——その2

「復興の記録を自分たちの手でつくろう!」と、平成23年の秋から始まった「だれでもフォトグラファ」のプロジェクト
すでに2年半続いている

買い物かこの片隅に、自家用車の座席に、いつもカメラを持って「フォトグラファ」たちは、記録を続けている

小本駅構内の写真展は、今年で3回目

東京都中央区立女性センターにも、遠く6、000マイル離れた

米国ヴァージニア工科大学にも展示され

「被災地のいま」を伝えることができた

レンズを通して、「フォトグラファ」たちは

ふるさと岩泉の美しい姿を再発見し

復興への意欲をふるい立たせている

写真から、被災地が元気になる様子を伝えたい



小本仮設配置図



小成仮設配置図



岩泉仮設配置図

12人のフォトグラファが語る…

仮設暮らしの喜怒哀楽、復興への焦りや希望、
ふるさと岩泉の未来の姿……

カメラのレンズを通して、フォトグラファたちは何を発見したのか。
参加の動機からこのプロジェクトの意義まで、彼らの本音を聞く。

(座談会は25年9月20日、21日に時間の都合が合ったフォトグラファに集まってもらって実施)



もう少して70歳になります。日頃から写真好きで、時々写していました。が、どうもどういふふうに写しているのか分からなかった。職業が床屋なので、そういうことをお客さんと話して

織笠清さん

とても面白いので、お客さんたちに話して誘っています

1 なぜフォトグラファに？

- 「だれでもフォトグラファ」に参加したきっかけを教えてください。
- 以前から写真を撮ることは好きでしたか？
- どんなお仕事をしていますか？

いたら、「だれでもフォトグラファ」があると聞いて、喜んで参加しました。

カメラは一眼レフ（それは息子が使っていたお古です）と、デジタルも持っていて、2台を使っています。息子のヤツは連写できるものでしたが、津波にもって行かれて今は何もあります。津波の前までは、時々写していたんですよ。もみじを下の方から写して青空をバックにするとか。小本川にかかる橋を小本橋からずーっと大川地区の方まで写していったりもして……。でも、もうそれも思い

出だけになりました。

「だれでもフォトグラファ」は、とても面白いので、一人でも多くの人に参加してもらいたくて、お客さんたちに話して誘っています。もう2人誘ったかな…。今度その人たちが、また知っている人を誘ってくれるだろうからね。

三浦幸美さん

学校の頃からカメラ使っていたので、写真撮るのには慣れていきます

今は知的障がい者の施設「いず



みの里」というところにいて、岩泉弁で「がんばっぴゃー」っていうTシャツとポロシャツの印刷と注文を受けています。それを来月の「里っこ祭り」に向けて準備しています。今度は岩泉地区にあるグループホームの方で、「里っこ祭り」をやるって言うから、それに向けて販売の準備をしています。その様子を写したり、職員を囲んで写真撮影したりしています。先生と一緒に撮ってみたり、三陸鉄道の中とか、いろいろ写してみました。被災地障がい者センターみやこのスタッフと水族館にも行ったし、ここ（小本仮設団地）で沖繩の人たちが踊りもしてくれました。そういうのも撮りました。IBC岩手放送の人が、ラジオが終わった後に焼肉食べながら公

開収録もやった時のことや、親が寝てる間にこそっと撮ってみたりしています。学校の頃から使い捨てカメラを使っていたので、写真を撮るのは慣れていきます。

三浦悦子さん

カメラ、やってみてよかったですね…

織笠清の妹です。5人兄弟で、小本にいるのは2人だけで…。カメラ、写真は娘に勧められてやっていますけども、なかなか「ここ」っていいとこがなくて、撮れ



ないんですよね。(三浦幸美さん介入)「あたしが「おっかあ、やってみないかー」って。ひとまず誘ってみて…」

でもカメラをやってみて良かったですね。仕事をしていないので、狭いところにいるよりも外に出て…。年取った方がベンチに座っていると撮ったり、ここ(仮設)でお茶会みたいなのがあった時、月に2回くらいかな。お茶をこちそうになった時、撮ったりしました。カメラを持ったのは初めてです。

箱石京子さん

プロのカメラマンが来るということだったので、勉強しようかと……

写真撮ったことは全然ないので、勉強しようかと思って。プロの人が来るということだったので。そういうきっかけです。なかなかカメラを持って歩く機会がないので、途中でやめちゃったんですけど。人にカメラを向けると嫌がったりするので近くに寄れない。寄ると避けてしまうので、寄れないような感じです。

仕事は今は、していません。今日は畑に行こうと思ったところだった。朝は車で業界紙の新聞を配達しているけど、車を停めて写真撮るのはなかなか難しいで



すね。

和野浩也さん

「重装備」で写真撮っていると、お巡りさんに呼び止められたり…

小本の岩手アライ(株)で仕事をしています。昨夜の「だれでもフォトグラフア」の会合にも、仕事があった参加できませんでした。夜中の2時まで仕事でした。

写真を撮ることは3年ぐらい前に始めました。その後、機材はだんだんに買い足してきました。特



に撮りたいものがあつたという訳ではないのですが、何か始めたかったです。周りの風景とかを撮っています。とりあえず、年中通して撮ってみたいというのがあつたので。

交換レンズや大きなカメラを保持した「重装備」で写真を撮っていると、お巡りさんに呼び止められたりして「どこから来たのか？」などと質問されたりします。でも、撮れるチャンスがあれば、いつでも撮ってやるう、と思っっています。

佐々木悦子さん

最近撮る方も楽しいなどいうか…変わってきたような気がします

仕事は社会福祉協議会の障がい者の施設で調理員をしています。



ずっと写真は撮られるのが好きでした。思い出に残るのは写真しかないと思っていたので、撮ってもらうのが大好きだったんです。なので、自分から撮るっていうのはあまりなかった。いろいろ趣味があつたんですが、津波の後、どれもやれない状態になってしまったので、何かやりたいなど思っているところにこの「だれでもフォトグラフィ」があつたので、それから始めたっていう感じです。チラシなんかあつたんですよね。それを見てやってみようかなと。やっぱり趣味がなくなるのは気持ちが減入ってしまうと

ころもあつたりして。

自分が踊りを習っていたので、その踊りをビデオにまとめてCDに編集したり。それも全て流されてしまつて、目に映る思い出がなくなつてしまったので、写真とかを残したいなというきっかけで始めました。「2人して復興の様子を見てやろう」って感じで、夫も参加していません。

最近撮る方も楽しいなどいうか…風景を見て、「ああきれいだな、残したいな」と思ったり、前とは変わってきたような気がしますね。

金澤千鶴子さん

みんなすごい、素晴らしい写真があつたので、「私も撮ってみようかな」と

佐々木悦子さんと同じ社会福祉協議会で仕事しているのですが、私はデイサービスの方で、昼食の提供をしています。

たぶん私は24年3月の小本駅で開催された最初の「だれでもフォトグラフア」の展覧会を見てから参加したのだと思います。みんなが撮った、すごい、素晴らしい写真が貼ってあったので、それで私も撮ってみようかなと思ったのが参加したきっかけです。

子どもが小さい時に成長記録としての写真は撮っていました。普通のデジタルカメラで。やっぱり



そういうアルバムとかはみんな流されちゃいました。

小成智子さん

秋の夕焼けがすごくきれいで、そういうのを撮って残してみたかった

アルバイトをしています。今までカメラは持ったことがなくて、初めて持ちました。毎日の日常生活に暇を持て余してて、何かやりたいと思い参加しました。*どこでもカフェ」に参加した際にチラシをもらって、この「だれでもフォトグラフア」に参加しました。

中学までは小本にいて、高校は宮古市で、卒業してから東京に行って働いていました。津波の半年前にこっちに戻ってきました。



こっちに來たら自然がたくさんあって、震災のあった年の秋の夕焼けがすごくきれいで、そういうのを撮って残してみたかったという気持ちがあり、それから参加するようになりました。

三浦忍一郎さん

「これは人に見せてもいいかな」と思えるような写真を撮っていたんですよ

*「いきがいくラブ」に出たら、こういうのがありますからということ、参加してみようと思いま

*東日本大震災の被災地の各地で移動して開催するカフェ。(ユイファ・ジャパン(国際女性建築家会議日本支部)主催)

*町民課が県の補助を受けて取り組んでいる「高齢者の新たな生きがい創造事業」のことで、通称は「小本地区いきがいくらぶ」。料理教室や健康カラオケなど実施している。



した。写真は中学からやってました。自分から見ても、「これは人に見せてもいいかな」と思えるような写真を撮っていたんですよ。東京の学校を卒業してアルバイトをしていた時、その会社の社長が日大の芸術学部を卒業されていた方で、その関係で日大の写真関係の学部に入っている学生さんが3人くらいアルバイトに来ていたんですね。そこで、光がレンズに入っでどう屈折するかとか、写真に関していろいろなことを教えてもらいました。二十二、三歳のころ、

東京のアパートで。さくらフィルムでコンテストがあったんですけど、この年の初秋くらいかな。その時コンテストに写真を出したんですけど、2位になりました。二コンのカメラを貰ったんですけど、もうないです。津波で水が入ってしまったって捨てました。コンテストの日に撮った写真もありましたが、水で駄目になって捨てました。

三浦淳一さん

若いころはいろいろ挑戦しました

カメラを始めたのは中学3年生の頃です。最初は他人のカメラを借りてやってみました。そのうち親にミノルタの二眼レフを買っても



らって、そのうち他のもないな—と思うようになりましたが、なかなか高くて買えなくて。知り合いがキャノンのAE1プログラムの持っているのを、それがいいな—と思い、社会人になってから給料でフルセットで買いました。下手の横好きで「いいな—と思うものをずっと撮ってました。四つ切りくらいまで伸ばしたことがあります。夜に小本大橋を、バルブを開けっぱなしで撮ったことがあります、うまく撮れて部屋に飾っていたんだけど、津波でやられてしまいました。あとは、田

野畑村の鶴ノ巣断崖の方に行った時は、崖の端まで行つて、下の方から上の所まで写るように撮つた。若いころはいろいろ挑戦しました。でも、そのカメラも津波でやられてみんな捨ててしまいました。津波で会社がなくなつてしまつて、今は無職で、ハローワーク通いをしています。思うように写真撮り歩くこともできなくて。

佐々木一幸さん

ふだんからカメラを鞆に入れて持つて歩いてます

漁協（小本浜漁業協同組合）の職員です。「だれでもフォトグラフィア」は、確か広報などと一緒にチラシが入つてたと思うんですね、それで記録を残しておいた方

が良いかなという思いで参加しました。前から旅行に行つたりした時の写真を撮つたりしていました。ニコンの一眼レフを持っていません。2階にあつたので津波の時も大丈夫でした。今はデジカメだけでいいかなつて感じですが。写真を撮るのは、朝早く家を出た時とか、あとはフォトグラフィアの先生から言われたので普段からかばんに入れて持つて歩いています。カモシカと遭つた時は持つてなかつた。残念だつたな。カメラ歴は、社会人になつてからですかね。妻と一緒に参加しています



ど、お互いに自分の空いている時間に出かけています。

箱石美慈子さん

いいのができたら絵葉書になるかしらという感じ

参加したきっかけは、弟（箱石昌彦さん）がこれに参加しているって聞いて、その写真を見せてもらつたら「楽しそう！」って思つて参加しました。今まで撮つていた写真はお花の写真が多くて、いろんな公園で今は何が咲いてるよつて聞くと、それを撮りに行つたりということが多くて、風景を撮ろうとかは特になかつたです。いいのができたら絵葉書になるかしら、という感じで撮っていました。でも、津波の後ではな



なかない花もなくて。公園に行くこともなくなりました。プリントアウトするのは上手に撮れた時くらいです。携帯で撮って、パソコンに入れて出して見ながら「どれがいいかな」とか。今、私は父と母と3人で住んでいて、弟は別の世帯です。6月までは弟が父母と住んでいたんですけど、私が千葉県からこっちに帰ってきて、弟は別です。同じ小本仮設の中なんですけどね。

2 何を撮るか？

レンズの向こうに何を発見したか？

- どんなものを撮っていますか？ どんなものを撮りたいですか？
- 写真を撮るようになってから、岩泉のまちについて、気付いたことがありますか？

織笠 清さん

砂浜に育つ植物は……津波にも負けないものもある

今度の写真にも入っているんですけど、「はまぼうふう」っていうのがあったのに、なくなってきた。種を蒔いても2年目じゃないと芽が出ないんですよ。2年目ですよ。やく芽が出て、今は結構生えてきた。おひたしに良いなって。昔は小本の砂浜にいっぱいあったんですよ。それを茹でて酢味噌で食べました。それは食べると痛風に

いいんだそうです。でも、今回の津波でやられた。津波で流れて日津狩りの御前様の前は全然なくなりましたが、ハマナスが結構あるんだって。小さいころ、ハマナスの実を、「ヘイタマ」と呼んでよく食べた。海の植物も津波に負けずに残っているのがあるらしい。種を取って置いて、元のところに戻してやろうかな、とっています。こうした植物の変化も写しておきたい。デジタルカメラだと寄って撮れる、インスタントカメラだと、ピン트가合わないのではないかと、その

辺も今度教えてもらいたいと思っています。みんなが集まって話せば、いろいろ知恵もでるしね。

三浦悦子さん

恥ずかしがるけど、やっぱ、「人」かな…

カメラ向けると、「ひょい」って向こうを向いてしまうんですよ。娘（三浦幸美さん）がカメラを向けると、みんな、顔隠すんですよ。でも、私はなんとか…なかなかペン



チのところでお話している方は、たくさんはいないんですよ。小本駅に子ども図書館ができたとき、トキオの山口達也さんが来て、駅前がすごい人出だったね。ちよつと遠かったけど写真を撮りたかったね。

三浦幸美さん

私は小ちゃい子が狙い目

お母さん（三浦悦子さん）ならカメラを向けてもみんな普通につきよると話しているから写せる



けど。私だと顔を隠したりするから、小っちゃい子たちを狙い目にしてる。小さい子から動物が狙い目かな。

織笠清さん

年寄りのしわも写したい

いつか『岩手日報』に載ったのだけれど、年寄りの人の顔のしわがくつきりと写っているんですよ。ああいうのをどうやって撮るんだか知りたいね。



*日本テレビ開局60周年特別企画の1つとしてできた図書館。本は全て全国から寄贈された。



箱石京子さん

出かけるときには、「カメラを持っていこう」という感じになるよね

「だれでもフォトグラファ」でカ

岩泉にはたくさんの行事がある——盆踊り、七ツ舞、七頭舞、さんさ踊り、神楽……。七頭舞は、中野七頭舞が一番盛んで、お祭りの時は全国から人が集まってくる。学校の先生なども習いに来ている。



和野浩也さん

今は自分の歴史を取り戻すために

津波が来た日は夜勤の日でした。夕方5時から仕事なので、家

メラをちょこつとでもやったので、大阪に行く用事があった時にカメラを持っていたら、友達から「まあ気が利くこと！」と言われました。1回でもやったことがあったら、出かける時に、「カメラ持っていこう」という感じになるよね。

にいました。その時地震がきて、揺れの感じを見ていて「来るな」と思って、カメラを持って外に出ました。NTTの施設の近くにある町の指定避難所から撮りましたが、木が邪魔で撮るのが大変でした。「怖い」というより「嘩然」という感じでした。正直、こんなでっかいのが来るとは思ってなかった。とにかくシャッターを切り続けました。普段は主に風景を撮っています。花も撮りますけど。人はちよつとトラブルもありますし、あまり撮りたくない。カメラ向けると威圧感もあるし。

隙があれば撮ってやろうと、カメラ道具を持ち歩いていきます。震災がきっかけで、ずうっと見慣れていたものがなくなり、撮っておけば良かったというのもあって、

*「明日の岩泉へ その1」(P.36)

これからも撮っていききたい。

被災前のまちの風景が貴重なものだったことに、なくなってしまう感じがして感じですね。普段だと当たり前で、写真に撮っておこうという気もなかった。まあ、自分の小さいころの写真があまり残っていないっていうのもカメラを買ったきっかけだったかもしれない。自分の歴史がなかったというか。これからは、自分が写っていないけれども、写真を残しておきたいなっていう感じが強い。

佐々木悦子さん

初めは仮設に居る人たちを撮っていました

だんだん「自然や風景」を撮る方になってきましたかね。土曜日、



日曜日しか写真を撮る時間がないので、普段からカメラを持ち歩くというよりは「今日は撮ろう」という感じで出かけます。夫もこの「フォトグラファ」に参加していますが、二人一緒に行くのではなく、それぞれかな。カメラを向けると、自然にピースサインを出したり、笑顔になったり——みんな表情が豊かなんですよ。フォトグラファをやりだしてから、風景を見る目が変わったような気がします。例えば、新巻鮭などが干し

てあっても、今までは何とも思わ

なかった、当たり前前の風景だったけれど、写真を撮るようになって少しずつ興味が深くなったという気がします。写真を撮るには、どの部分を撮れば良く撮れるのかなとか、どこを中心に撮ったら新巻らしくなるのだろうか、見る目が変わったというか、モノを気を付けて見るようになったというか——今までは大ざっぱにしか見えていなかったのかな。

金澤千鶴子さん

あまりテーマを決めずに撮っています

気が向いた時に撮っています。例えば急に空を見たらきれいだっとか、花を見たらそれも撮った

りして。小成智子さんは、いつも風景を撮っていますが、写真を見ると、見慣れた風景も写真の撮り方で違うものに見えたりする。あれは撮ろうと思ってもなかなか撮れない写真ですね。その人の感性が写真に出るのだなって思います。

小成智子さん

「人」を撮るのは難しくくて…

「人」を撮ってみようとずっと思っているのですが、難しくくて…



すぐ「風景」になってしまいます。岩泉の自然は素晴らしいと思います。ですが、小さいころの「自然」と大人になって東京から戻ってきてからの「自然」と比べると、小さいころの方がもっと「自然」が多かったです。夏は蛍が家の中に入ってきたりしてきれいでした。そういうのがごく身近にありました。今ではもう見られませんが。カレンダーでいろいろな自然を写したものがあと思うのですが、そういうものを見ていたので、自然を撮るよ

うになったのかもしれない。

佐々木一幸さん

同じ場所がどのように変わっていくかを撮り続けたい

カメラを持ち歩いているつもりなのに、やっぱり持っていない時もあります。そういう時に夕日とかカモシカとか、普段見られないものに出会うと悔しいですね。あの程度の場所を選んで継続的に撮って、それがこれからどのよう



に変わっていくか、その過程を撮っていきたくて思っているんですけど、同じ場所には立ってないかもしれないけれど、同じ場所を撮ってみたいね。

三浦忍一郎さん

今は「何を撮ってやろうか」と、考えているところです

持っていたカメラや気に入った写真が津波でやられて、今度は何を撮ろうかと考え中です。これか



ら秋になるので、秋に向けて復興の様子や秋らしい何かを撮ろうと。やっぱり写真には四季を感じるような撮り方をしないと、その写真は活きないと教わった。四季の中の復興を撮りたい。

箱石美慈子さん

「ついでに」撮る！

そんなにママに撮ってるわけではないです。わざわざ写真を撮りに出かけるっていうことはなくて、出



かけついでに撮るって感じですね。

三浦淳一さん

小さな集団の大きな発見！

フォトグラフィアに参加して、みんなの写真を見て「あー、こういうのもあるんだな」と思いました。みんなの写真を間近に見られたのはとても良かったです。目には見えていても、時間の流れの中でほとんど気付かないことを、皆さんの写した写真を見て「こういうと



ころもあるんだな」と再発見しました。小さな集まりの大きな発見ですよ。そんなに大人数ではな

3 復興の進捗と

「だれでもフォトグラフィア」の今後は？

- 復興しているな、と感じることは？
- これからのフォトグラフィアは？

三浦幸美さん

道路がちゃんとなってきたけど、敷地はまだ草ぼうぼう

朝、バスに乗って病院に行く時、自分の家が建ってたところをバスの窓から見たら、家の前の道路はちゃんとなってきたけど、敷地の中はまだ草ぼうぼうだった。草だけ見るとなんか思い出したく

いグループですけど、その中の人たちが撮った写真から得るものは大きいですよ。

ない。私は津波を見なかったんだけど。お母さんと弟は見た。

三浦悦子さん

これから移る場所は工事が進んでいる

三陸鉄道小本駅の南側の災害公営住宅に申し込んでいます。今は、工事している真っ最中。来年の4

月から月にカギの受け渡し式があるとか。閲覧板か何かで見た。

織笠清さん

ずいぶん頑丈に造っているね

ずいぶん立派にやるもんですね。基礎の下に土を持ってきて固めて、また土を持ってきて固めて……ずいぶん頑丈にやるんだなって。

フォトグラフィアに関しては、これまでやってきた合評会のようにみんなで画面に撮った写真を映しながら、「ここがいい、あれがいい、こうしたらいい」と言いあうのも大事だけれど、先生と一緒に歩きながら、撮影会風に教えてもらいながら写すというのをやりたいね。もう少し先でもいいけど、これから紅葉が始まるし、冬は冬

で雪の景色もきれいだ。

和野浩也さん

「まだまだ」のところは

「まだまだ」

復興の工事はそれなりに進んでいるように見えるけど、やっぱりまだまだのところはまだまだですね。被災した人で移るところもまだ確定していない人もいるし、これから住むところを決めている人たちも「これでもいいのかな」って思っているでしょう。

「フォトグラフィア」では他人の作品を見られるのが良い。被写体と同じでも写す人によって全く違う作品になるものね。「これは自分には撮れないな」って思うものもある。せっかくこうやって人が

集まっているので、続けられるといいと思う。

三浦忍一郎さん

「楽しい」が基本

写真を撮っている時は楽しい。フォトグラフィアはそれが基本だから。続けられるといいね。

箱石京子さん

復興を感じるとまではいかない

「復興」って「なるようにしかならない」んじゃない？ そんなに急いでもね。急にはできないんじゃないの。仮設住宅から移るところもまだ決めていない。復興はまだまだかもしれないね。阪神淡路大地震より被災した範囲が広い

から、仕方ないけど。

佐々木悦子さん

これからもずっと続けたい

フォトグラフィアはこれからもずっと続けていきたい。レンズの中から見えるいろいろな風景、みなさんの笑顔をずっと見てゆきたいです。

金澤千鶴子さん

家はなくなってしまうので

移転しますが、まだきちんと決まっていないです。元の家があった場所に行くと、涙が出ます。

三浦淳一さん

復興公営に期待している

うちはもう解体してしまいました。仮設から出て、どこかに入るとしたら、災害公営住宅ですね。

箱石芙慈子さん

思ったほどスピードアップしない

まだまだかかって。こっちに帰ってきたのが6月なんですけどもつとスピードアップするかなと思っていたのですけどなかなかそうはいかない。何ができるかというと自分では何もできない。

小成智子さん

復興はただ早ければいいというものでもないし

災害公営住宅の建設や道路の建

設が進んでいる状況を見ていきたいと思っています。のんびり屋さんなので、もちろん「早く復興したい」と思いますが、「ただ早ければいい」というものでもない。急いで残念な結果にならないように、いろいろと吟味を重ねてみんなで楽しく過ごせるまちを造ってほしい。

私は家が残っているので補修して戻る予定ですが、怖いので戻りたくないとも思っています。現状は、1階は住めない状態。2階は残っています。

私は津波の半年前に東京から戻ってきたので、みなさんに比べたらまちへの愛着が薄いかもしれませんが。東京でアパート住まいだったので、一軒家は贅沢に思えるんですがこっちの人にはそれが当たり前。その思いも分かるので、で

きるだけ協力して楽しくやっていたらいいなと思います。

佐々木一幸さん

まだまだ時間はかかるかもしれない

それぞれの人が建てたい家の場所を決めるにも、1年後から2年後くらいじゃないと駄目じゃないかなと思う。災害公営住宅は、来年の4月から5月ごろから抽選で入るようになると思うけれど、まだまだ自宅を建てたい人や家が道路にかかる人などもいるので、この仮設はあと2年から3年は在るんじゃないかなと思っている。「フォトグラフア」もその間、続けられれば続けていきたい。

仮設の生活—その後



クリスマスツリーができた! 金澤千鶴子





ワイ、大雪だ！ 三浦登紀子





春の雪 小成智子



仮設のひな祭りも2回目 小成智子



仲良しのふたり 三浦トシ子



こんなところにもつららが… 佐々木悦子



ある日の仮設 三浦悦子





みんなで作る 三浦悦子





迎え火 箱石昌彦



けろけろな花たち 三浦登紀子



見物中 箱石昌彦



岩泉仮設・その後 熊谷貴里子



緑の中の小木仮設 佐々木悦子



モン竜ロマンクルーズ 熊谷貴里子



船は行く 熊谷貴里子

仕事の風景





フノリの収穫 三浦浩子





小舟の刺網漁 加藤勝彦



ウニ漁 金澤千鶴子 関



仕掛けのある風景 小成智子





第十五長宝丸進水式 箱石昌彦



漁港 加藤勝彦

復興の進捗



港 鈴木孝徳



田んぼの埋め立てが始まる 佐々木一幸







災害公営住宅の工事 小成智子





津波堆積土の処理 2 三浦浩子



津波堆積土の処理 3 佐々木一幸



ここにみんなの家があった。佐々木悦子



災害公営住宅建設中1 三浦忍一郎



縦貫道の建設 佐々木一幸



災害公営住宅建設中② 三浦烈一郎



港 三浦浩子





働<重機 田中道雄





工事現場の日の出 鈴木孝徳





小本地区の未来をつくる 加藤勝彦





我がまちの復興を見る 金澤千鶴子





転居・新築・移転 織笠清



73
浸水地域に咲く 三浦登紀子

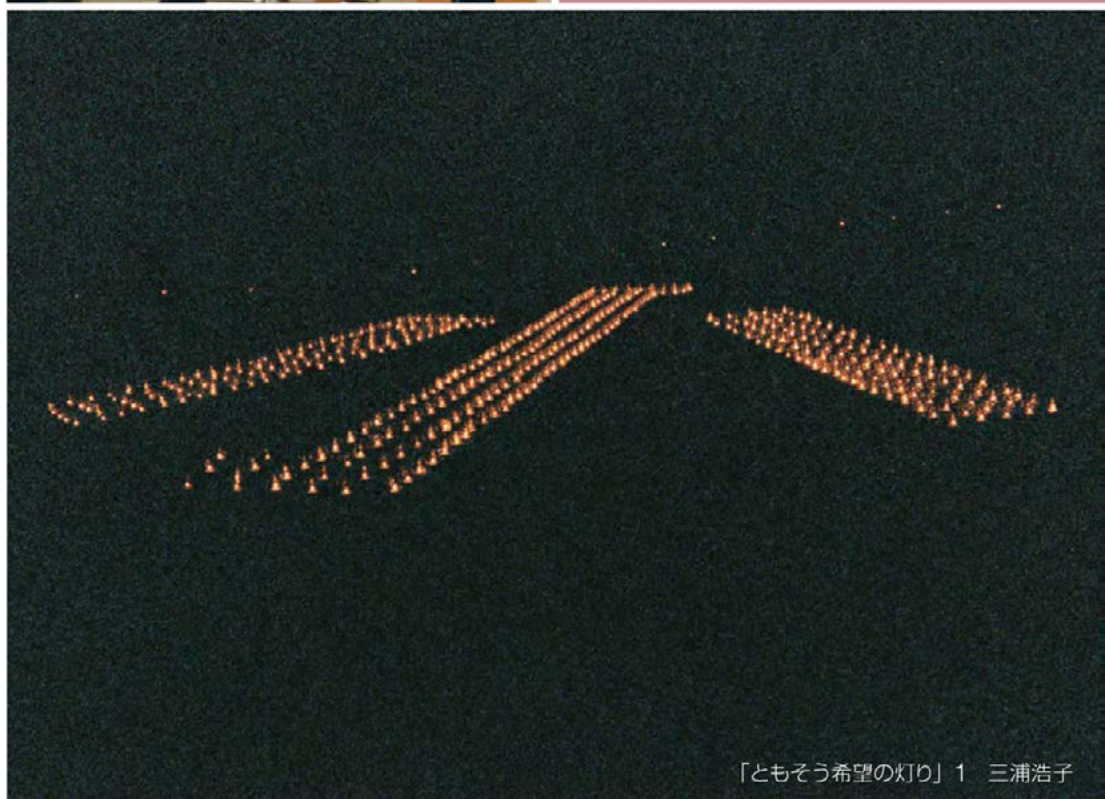


平成 25 年 3 月 10 日 小成智子



成人式 鈴木孝徳

集
い





ハッピーキュー 田中道雄



「ともそう希望の灯り」2 織笠清

岩泉町社会福祉協議会



「震災復興夏祭り」 熊谷貴里子



76
盛岡さんさ踊り 佐々木一幸



踊る 三浦幸美



77
集合 小成智子



ひなたぼっこ 織笠清



ラジオ公開録音の日1 加藤勝彦



敬老会 熊谷貴里子



ラジオ公開録音の日2 佐々木悦子





茂師海岸 熊谷貴里子

美しい岩泉





雨降りのあと 小成智子



白鳥 三浦登紀子



喜い田 佐々木悦子



水芭蕉 小成智子



八重桜 小成智子



宗得寺 三浦登紀子



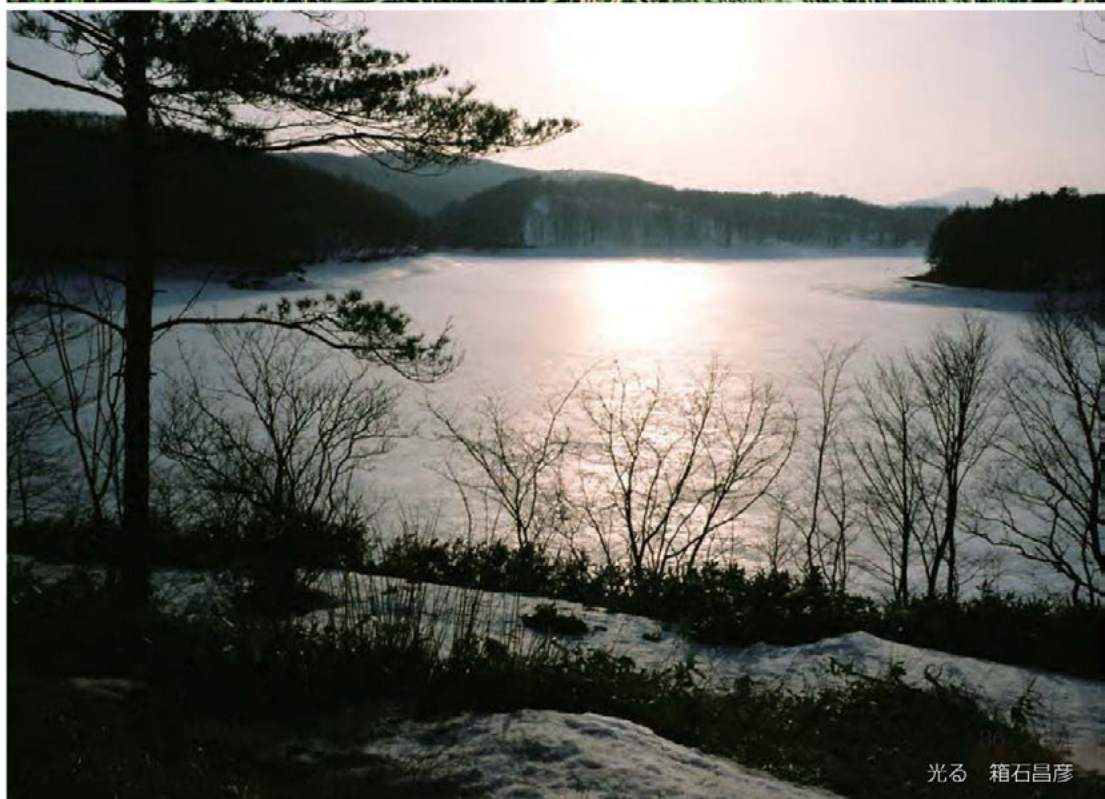
コスモス 三浦登紀子



花いっぱい運動 熊谷貴里子



稲穂 佐々木秀明



光る 箱石昌彦



風 小成智子



霧 田中道雄



野焼き 織笠清



女神橋から望む 田中道雄



浜 田中道雄



籠甲岩 和野浩也

撮 影 会

平成25年12月8日

■撮影指導：橋本照高（写真家）

撮影した写真を映しながら

「わいわい」「がやがや」と

いつも楽しい「だれでもフォトグラファ」の合評会

でも「たまにはプロカメラマンと一緒に歩きながら

撮影指導を受けたい」との要望にこたえて

「撮影会」が開催された

テーマは、「お世話になった仮設」

会場は「小本仮設住宅団地」

狭くて、寒くて、大変だった仮設暮らしも

いとおしく感じられるようになる……





佐々木秀明





和野浩也



92

佐々木秀明



三浦トシ子





三浦悦子



佐々木悦子



箱石美慈子



三浦幸美



箱石美慈子



熊谷貴里子



三浦悦子



94
佐々木一幸





箱石昌彦



箱石昌彦



小成智子



佐々木一幸



佐々木悦子



三浦幸美



三浦悦子



96
和野浩也



三浦忍一郎



熊谷貴里子



三浦トシ子



小成智子



小成智子



97
和野浩也



織笠清



佐々木一幸





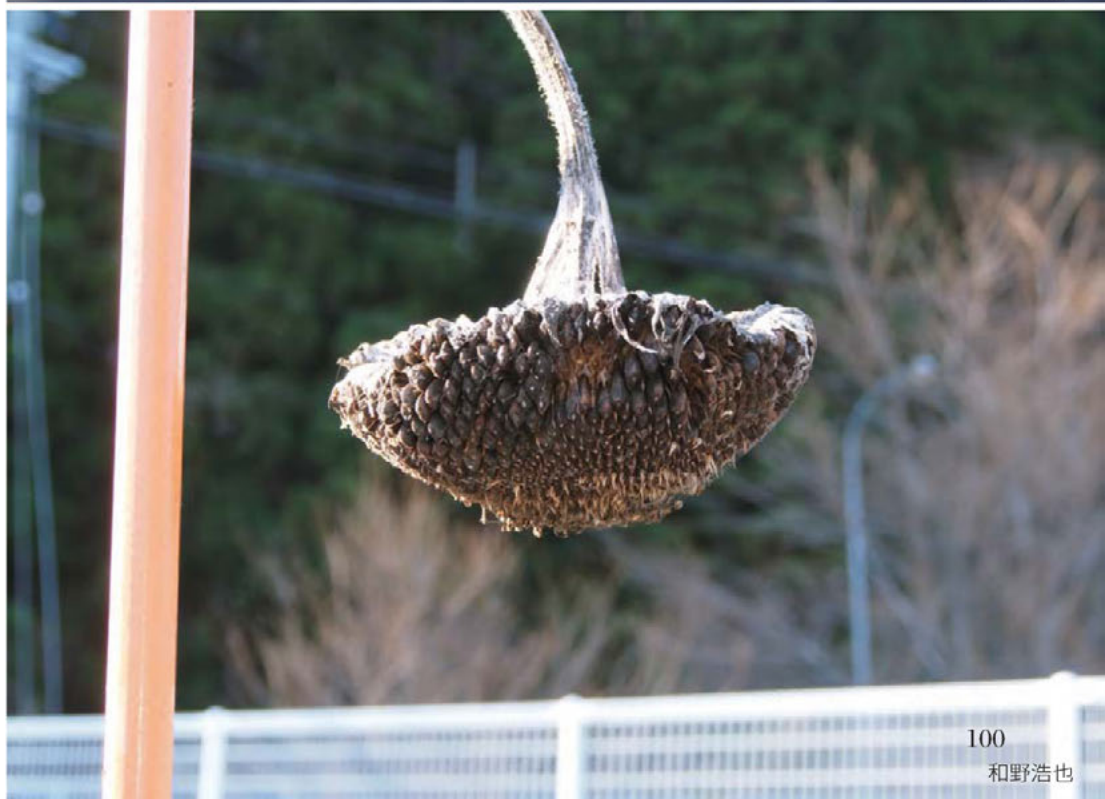
三浦淳一



織笠清



箱石芙蓉子



第4章

この一年の出来事

恒例行事の再開

毎年開かれていた新年会

楽しみに練習に励んでいた演芸会

3・11を境に生活が一変し

思いを馳せる余裕もなかったが

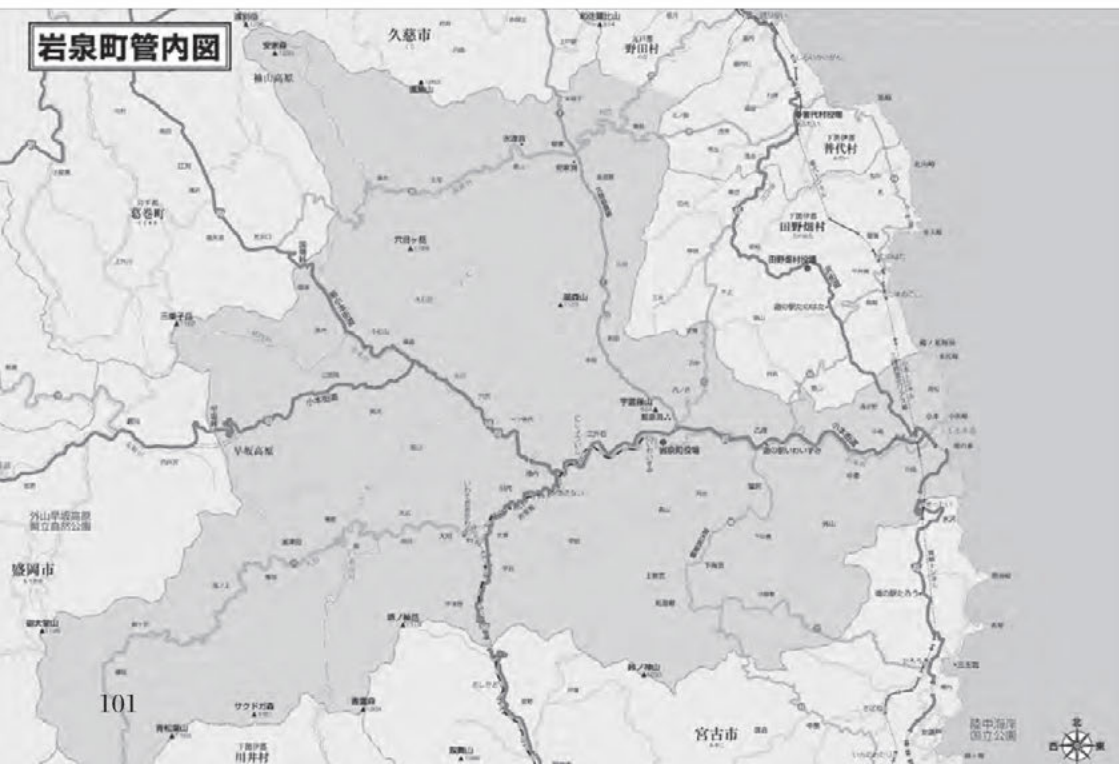
この一年、日常を取り戻そうとする

皆の力が結集し一歩一歩、前へと動き出し

少しずつ再開し始めている

25年中の出来事や復興の進捗を振り返る

岩泉町管内図



冬

2年ぶりに開かれた新年会や演芸会。厳しい寒さにもかかわらず多くの住民が集まり、歌や踊りに、会場は笑顔と歓声に包まれた。

◆2月24日

被災地域の未来の姿を子どもたちが考えるワークショップ「こどもふっこうかいぎ in 小本」が開催された。主催した県立大学総合政策学部の伊藤英之准教授と同校の学生が進行役を務めた。参加者は小本小学校の児童8人、小本中学校の生徒5人。「未来の小本に欲しいもの」



平成 25 年 1 月	
5日	<p>・小本地区新年会が2年ぶりに開催され、住民約60人が出席しカラオケなどで楽しんだ。お楽しみ抽選会は豪華景品が当たるとあって盛り上がりを見せた。(小本生活改善センター)</p> 
9日	<p>・小本浜漁協新年会が開催された。(龍泉洞温泉ホテル)</p>
11日	<p>・小正月の行事「みずき団子づくり」を園児と地域の高齢者で行った。(小本保育園)</p>
13日	<p>・小本地区助け合い演芸会が2年ぶりに開催された。出場した団体は20団体。35演目。日頃の活動を通して練習した歌や踊りを披露。(小本小学校大牛内分校体育館)</p> 
19日	<p>・料理教室と軽スポーツの講習会を開催。仮設住宅などの環境で新たな生きがいを見つけたいと集まった住民はおしゃべりしながら生き生きとした表情で参加していた。(小本生活改善センター)</p> <p>・「岩泉を語る会」が地域振興協議会主催で開催された。(町民会館)</p> 
24日	<p>・町立大川中学校の全校生徒9人は「一歩一歩前へプロジェクト」で新年も復興に向けて一緒に歩んでいきたいと思いますとの気持ちをこめて、新年の挨拶を手紙に書き、町内3カ所の仮設住宅団地に届けた。</p> 
27日	<p>・東日本大震災の津波で被災した「第十五長宝丸」の進水式が行われた。小本地区で被災した漁船の新造はこの「第十五長宝丸」が最後ということで、多くの住民が集まり、新しい船の門出を祝った。子どもたちも威勢よく餅やお菓子をまいた。(岩泉町小本漁港)</p> 

を話し合い、未来の小本の姿を描き出した。(小本生活改善センター)

◆3月10日

「3・11メモリ

アルイイベント」

犠牲者の冥福を

祈ると共に、津波

の恐ろしさを風化

させることなく後

世に伝え、一日も

早い地域の復興を

祈念した。強風のため室内で開催。

黙とう・献花・未来の小本発表・「絆

かけがえのないあなたへ」献

唱。(三陸鉄道小本駅前)



◆3月11日

「ともそう希望の灯り」が行わ

れた。キャンドル約2千個と住

民達が作った夢灯りの灯籠が並べ



平成25年2月		
5日	・小本中野地区の築山避難路の築造工事安全祈願祭を行った。延長は小本川水門から中学校裏山の高台まで400m、高さ約7～8m、道路幅約5mで、漁港付近で働く人々が素早く安全に避難できるよう防災体制を強化した。	
16日	・国際ソロブチミスト昭島から寄付金の贈呈。(東京都昭島市)	
20日	・県立岩泉高等学校から、文化祭「泉高祭」の売り上げの一部を義援金として、町に「東日本大震災で被災した皆さんのために役立ててください」と手渡された。	
24日	・被災地域の未来の姿を子どもたちが考えるワークショップ「こどもふっこうかいぎ in 小本」が開催された。(本文参照)	
平成25年3月		
3日	・バレーボールの元日本代表の竹下佳江選手から被災地の子どもを励ましたいと、ユニホームが寄贈された。(町B&G海洋センター)	
4日	・三陸鉄道小本駅西側の中野地区に建築する災害公営住宅の敷地造成工事の安全祈願祭が行われた。工事関係者や町の関係者約30人が出席。公営住宅は面積約6,900㎡の敷地に木造住宅36戸を建設予定。 ・小本小学校の3・4年生30人が2年ぶりにサケの稚魚放流体験を実施。	
10日	・「3・11メモリアルイベント」。(本文参照)	
10日～	・「だれでもフォトグラフィア」第2回写真展を開催。これまでの写真(第I期)を外し、第II期・第III期の写真を展示。(三陸鉄道小本駅構内)	
11日	・「ともそう希望の灯り」が行われた。(本文参照)	
12日～13日	・台湾嘉義県の余政建議長ほか県議会関係者16人が小本中学校の卒業式に出席するために来町。同県との交流は被災地支援として同中の生徒がホームステイに招かれたのが始まり。	
13日	・小本中学校卒業式、卒業生16人。	

られ「希望の灯りをともします」の声とともに一つ一つに点火された。

震災での犠牲者のご冥福を祈ると共に一日も早い小本地区の復興を祈念するためにともしられた灯り。集まった住民はそれぞれの思いを胸に灯りを眺めている様子だった。(町仮設小本支所前の駐車場)



春

街路樹の新芽も膨らみ復興の植音も軽快なリズムで響き渡るなか、仮設校舎での小本小学校、小本中学校の新学期

平成 25 年 3 月	
19 日	・小本小学校卒業式。本校 11 人、分校 2 人、計 13 人が卒業。
23 日 ～24 日	・「第 6 回岩泉どこでもカフェ」を 3 仮設住宅団地で開催。どの会場でも、住民とメンバーが顔なじみとなり、絶妙なやり取りに笑いがあふれた。(小本仮設住宅、小成仮設住宅、岩泉仮設住宅)
27 日	・三陸沿岸道路・岩泉一田老間(6km)の起工式が岩泉町中島の整備予定地を会場に行われた。この工事は国の事業で宮古市の田老北インターチェンジ(仮称)と小本の岩泉龍泉洞インターチェンジ間に自動車専用道路を整備するもの。
平成 25 年 4 月	
1 日	・町社会福祉協議会いずみの里から復興支援「岩ばっぴやーT シャツ」などの売り上げの一部が義援金として町に届けられる。
2 日	・町内の保育園で入園式が行われた。小本保育園でも元気いっぱい園児たちが入園式を迎え、通園を楽しみにしている様子。
5 日	・小本中学校で入学式が行われた。新入生 13 人。
8 日	・小本小学校、同校大牛内分校で入学式が行われた。本校 7 人、分校 1 人が入学。
平成 25 年 5 月	
4 日 ～5 日	・龍泉洞まつり開催(龍泉洞)。中野七頭舞が出演。県内外からの観客から大きな拍手が贈られた。
12 日	・小本中学校体育祭開催。
14 日	・小本保育園児が(有)介護施設「あお空」を訪問。訪問したのは 3 歳～5 歳児の 31 人。ダンスを組ごとに披露した後、園児から入居者一人一人に色紙と折り紙で作ったペンダントをプレゼントした。



が始まった。

◆ 5月23日

岩泉字森の越で

災害公営住宅森の越団地の竣工式が行われた。テープカットの後、入居者一人一人に伊達勝身町長から鍵と記念品が渡された。災害公営住宅

森の越団地は木造平屋建1棟に単身者用6戸、2階建2棟にそれぞれ2〜3人世帯用6戸、4人以上世帯用3戸の計15戸。

25日から住民の入居が始まり、震災で被災した12世帯が入居した。

◆ 5月27日

ユイファ・ジャポン（国際女性



平成 25 年 5 月	
17日	・町が小本地区の住民に対し、復興事業進捗状況説明会を開催。（小本生活改善センター）
23日	・災害公営住宅森の越団地が完成。竣工式が行われた。（本文参照）
23日	・町が「びーちゃんねっと」事業の説明会を開催。同事業では告知端末を各世帯に配置し、町など公共施設から直接お知らせが届くようにする。32人参加。（小本仮設住宅集会場）
26日	・小本小学校運動会。
27日	・ユイファ会長のソランジュ・ド・ラ・トゥール氏が東北被災地訪問時に「小本ミニカフェ」を開催。（本文参照）
31日	・復興の花「中尊寺ハス」を広める会から復興支援として中尊寺ハス3株が岩泉町に贈られた。 ・大島理森東日本大震災復興加速化本部長が町役場を訪問。
平成 25 年 6 月	
2日	・被災者支援チャリティコンサート「輝」開催。大正琴扇靖流 220 名による演奏会。（町民会館）
6日	・小本小学校と同校大内分校の6年生 14 人が復興教育の一環として、修学旅行で訪れた盛岡市肴町で特産品を販売。
7日	・小本中学校の2年生 19 人が総合的な学習で、「地域を知ろう」のテーマの下、地元ガイドと共に小本地区を散策。熊の鼻展望台では太平洋を見渡しながらか津波時の写真と現在の景色を見比べ、地元の地形や産業を学んだ。



建築家会議日本支部)では、ユイファ会長のソランジユ・デルベツ・ド・ラ・トゥール氏をフランスから招き、東北被災地訪問旅行をした際、「小本ミニカフェ」を開催。沿岸部の被災地を歩き、小本駅構内での「だれでもフォトグラフィア展」を見学し、小本仮設住宅の住民と一緒に抹茶と手づくり和菓子を楽しみながら懇談した。

ソランジユ会長は「ここに來られたことは大変嬉しい。被災後の皆さまの頑張りに全世界の人々が



平成 25 年 6 月	
11 日	<p>・日本テレビ放送網「7days チャレンジ TV」の撮影が三陸鉄道小本駅「子ども図書館」で行われ、集まった多くの人が TOKIO 山口達也さん、COWCOW の二人とともに「子ども図書館」の完成を見守った。この図書館の書棚の本は全て、被災地を支援する目的で、全国から寄贈されたもの。(三陸鉄道小本駅)</p>
16 日	<p>・町消防団消防演習。(町内)</p>
18 日	<p>・県央地域に位置する西和賀町の西和賀老人クラブ(小田島三夫会長)の会員が岩泉、小本、小成の各仮設住宅団地を訪問。花の苗とプランター、培養土のセットを各世帯に1セットづつ寄贈した。花の苗は同会会員が「少しでも気持ちが明るくなって欲しい」との心を込めて育てたとのこと。</p> <p>・岩泉町の姉妹都市ウィスコンシンデルズ市から短期留学生 10 人が来町。うれいら商店街を散策。一行は 24 日まで滞在。小本や宮古市田老の被災地を見学した。</p>
19 日	<p>・町立小川小学校全校児童が復興教育の授業として、被災地ガイドの案内で被災した小本地区を歩き体験談を聞いた。津波はこの水門を超えてきたと説明を受ける。児童は被災前に撮影した写真と今の町並みを見比べ、ショックを受けたようだが真剣にガイドの話に聞き入った。</p> <p>・「くらうん・しゅがーの絵本ライブ」開催。岩泉の子どもたちに読み聞かせで笑顔いっぱいになって欲しいとの話から、宮古読み聞かせの会「おどっつあん S」が小本保育園にきた。絵本の読み聞かせの他、マンドリンの歌に乗せた読み聞かせ、手品などに子ども達が瞳を輝かせ笑顔一杯に楽しんだ。(小本保育園)</p>
23 日	<p>・JCP 宮古ボランティアセンター「小本無料市」開催。(小本生活改善センター)</p>



感動している」と挨拶した。





夏

紺碧の海と突き抜ける青い空、岩壁の緑。いつもと変わらぬ美しい夏景色。振り返ると一面の夏草。視界を遮っていたがれきの山も小さくなっていく。県内外の学生や観光客が東日本大震災の被害と復興への取り組みを学びに来た。

◆7月3日

災害公営住宅小本団地の起工式と安全祈願祭が開催された。地権者や工事関係者、仮設住宅の入居者など約70人が出席。伊達勝身町長は「地権者の協力は町民を代表して感謝する。一日も



平成25年6月	
24日	<p>・町立いわいずみこども園で、復興支援コンサートとして「トカルスキー・デュオ in 岩泉」コンサートを開催。同デュオは日本でも演奏活動をしているポーランド人の兄妹。22日に町民会館、24日午後には岩泉中学校でも演奏した。</p> 
25日	<p>・小本小学校の3・4年生34人がハイブリッドカー作りに挑戦。復興支援教室として、パナソニックキッズスクールが来校し開催。平らな道では太陽電池、上り坂では乾電池を使って走らせることができるハイブリッドカーの仕組みを学んだ。</p> 
29日 ～30日	<p>・「第7回岩泉どこでもカフェ」を3仮設住宅団地で開催。小本では要望により「簡単お抹茶教室」も開催した。茶道の精神を伝えながらの実習に参加者は真剣な眼差し。自分で点てたお茶を味わった。(小本仮設住宅、小成仮設住宅、岩泉仮設住宅)</p> 
29日	<p>・「だれでもフォトグラファ」開催。写真家の橋本先生による撮影指導を熱心に受講し、ますます腕を上げ撮影への意欲が感じられた。</p> 
平成25年7月	
1日	<p>・小本小学校6年生から町に義援金贈呈。修学旅行で町特産品を販売した利益を町に寄付した。(町長室)</p>
3日	<p>・災害公営住宅小本団地の起工式と安全祈願祭が開催された。(本文参照)</p>
5日	<p>・小本保育園で七夕会を開き、園児らが歌やゲームを楽しんだ。 ・町内の建設業者16社で構成される、町の復興を手助けする建設業の会から「復興事業に役立ててほしい」と寄付金が町長に手渡される。</p>
10日	<p>・根本匠復興大臣が来町。被災地視察と町長との意見交換を行った。</p>

早い完成を願っている」と挨拶。

◆ 8月10日

震災復興夏祭り
第12回岩泉町ボ
ランティアフエス
ティバルinおもと
。

例年うれいら




通り商店街で開催
されていた同イベ
ントを震災からの
復興を願って昨年

から小本地区で開催されている。
出店やステージイベント、カレー
ライスなどの振る舞いなどで盛り
上がった。(町役場仮設小本支所
前駐車場)



◆ 8月29日

盛岡市立城内小学校の5・6年
生5人が小本を訪れ、復興課の職

25年7月		
16日	・三陸高潮対策事業(県事業)安全祈願祭。	
17日	・文部科学省森政之防災推進室長が小本小・中学校の移転予定地を視察。	
27日	・B&G海洋センター水泳大会。小本の子どもたちも元気に参加。記録を競い合った。(海洋センター)	
30日	・俳優の袁川翔さんが小本保育園と三陸鉄道小本駅前で子どもたちにカプトムシとエサのセットをプレゼント。「被災地の子どもを直接元気付けたい」との訪問だった。	
25年8月		
1日	・「おもと夢灯り夕涼み会」がお盆の迎え火に合わせて開催された。町道小本中野線沿いで約200個の夢灯りが灯され、照らされた沿道に多くの人が集まり夕涼みや会話を楽しんだ。	 
1日 ~2日	・夏季休暇中の児童生徒の学習指導などを目的とした夏休み応援団が開催。小中学生が参加して、他地区の生徒児童とともに楽しく学んだ。(岩泉公民館)	
2日	・広島県のようにき屋本舗が小本保育園でお好み焼きを園児にふるまう。	
5日	・常陸宮ご夫妻が東日本大震災の被災者をお見舞いに当町を訪問された。岩泉地区災害公営住宅で入居者と懇談。お土産とともに励ましの言葉を贈られた。	
6日	・小本中学校と大妻多摩中学校(東京都)の生徒が地域住民を招いて合唱コンサートを開く。(小本生活改善センター)大妻多摩中学校は震災のあった23年度から継続して町を訪問しての交流が文化祭のバザーなどで町へ支援を続けている。 ・小本地区集団移転地等造成工事起工式と安全祈願祭が小本中野地区内の現地で行われた。伊達町長は協力者への感謝とまちの復興への期待を述べた。(小本現地)	
6日 ~7日	・夏休み応援団(2回目)。(岩泉公民館)	

員から被災当時の様子と復興計画等を聞き、その後、被災地ガイドの案内で水門や被災地

区域を視察。小本

小学校の避難階段

前でも説明を受け

る。「自分の身は自分で守らなく

てはいけない」と言うガイドの言

葉を真剣に聞いていた。

◆9月4日

筑波大学（茨城県）の学生31人

が被災地ガイドの案内で浸水区域

を歩き、ガイドの話に多くの質問

を寄せるなど、震

災と復興について

深く考えた様子。

釣り船乗船「モシ

竜口マンクルー

ズ」も体験。



25年8月	
8日	・中学生議会。各中学校の代表生徒がより良いまちづくりのために意見を発表。（役場議事堂）
10日	・震災復興夏祭り～第12回岩泉町ボランティアフェスティバル in おもと～。（小本支所前駐車場）（本文参照）
18日	・第47回岩泉町郷土芸能祭開催。小本からは七野七頭舞と中里七ツ舞が参加。年に一度、町内の郷土芸能団体が一堂に会するこの郷土芸能祭りは町内の9団体に加え今年には宮古市から田代芸能保存会が出演し、華を添えた。（町民会館）
18日 ～21日	・東京都昭島市の小学生派遣団が町内に滞在。小本地区の見学や漁船乗船体験の「モシ竜口マンクルーズ」などを体験した。
22日	・岩手県法人連合会女性部会連絡協議会から小本小学校、小本中学校にピアノを1台ずつ寄贈された。贈呈式ではピカピカの電子ピアノを頂いた子供たちの笑顔があふれていた。
29日	・盛岡市立城西小学校5・6年生5人が復興学習で小本を訪れた。（本文参照）
平成25年9月	
1日	・スポーツを通じた復興イベント「夏のいわて大運動会 in 岩泉」が（社）日本アスリート会議主催で開催。（ふれあいランド岩泉他）
2日	・花巻市立大追中学校と小本中学校が住民を招いて合唱交流会を開催。（小本小学校大牛内分校体育館）
4日	・神戸市甲南女子大学の瀬藤乃理子准教授を講師に迎え、「こころからだの講演会」を開催。参加者30人。震災のストレスの影響や対処法、気持を楽にする呼吸法などを学んだ。（小本生活改善センター）
	・国立筑波大学の学生31人が被災地見学。（本文参照）



秋

山の木々も色づき、自然も冬支度が始まる。

災害公営住宅小本団地の建設工事も進み、集団移転地と小本小学校・中学校移転事業、小本こども園（仮称）移転事業の造成工事も始まった。新たな生活に入る前に地域の記憶を残すさまざまな作業も始まった。

◆ 11月4日～10日

「記憶の街ワークショップ」が開催された。東日本大震災で被災した地域を復元した模型に住民が彩色したり、名前や思い出を書いた旗を立てたり、地域の記憶を模型で残す作業。「ここは倉庫で、ここは屯所で」と記憶を



平成 25 年 9 月	
6 日	<p>・ 県立盛岡第一高校音楽部の生徒が合唱コンサートを開催。住民を招き、小本中学校の生徒との合唱曲を披露した。両校の合唱交流は 2 回目。（小本小学校大牛内分校体育館）</p> 
8 日	<p>・ 小本地区敬老会開催。47 人が参加し、楽しいひとときを過ごした。</p>
10 日	<p>・ 清里フィールドバレー開催。世界最大級のオルゴール「ポール・ラッシュ」の自動演奏に合わせたバレーのミニ公演。（小本小学校大牛内分校校庭）</p> 
20 日 ～ 21 日	<p>・ 「第 8 回岩泉どこでもカフェ」を開催。災害公営住宅森の越団地が完成後、初めてのカフェを開いた。参加者は仮設住宅から公営住宅に移り、安堵した表情でお茶を楽しんでいた。（小本仮設住宅団地、小成仮設住宅団地、災害公営住宅森の越団地）</p> <p>・ 「だれでもフォトグラフィ」講習会開催。参加者は、撮影時の技法を熱心に受講した。（小本仮設住宅団地集会所）</p>  
24 日	<p>・ 町立小川中学校では全校生徒を対象に復興学習を行った。復興課職員を講師に招き、震災当時の様子や復興の歩みを真剣に聞き入り、日頃から災害に備えることの大切さを胸に刻んだ様子。</p> <p>・ 小本地区の茂師海岸などを含む三陸ジオパークが日本ジオパークに認定される。</p>  
26 日	<p>・ 盛岡市立巻堀中学校の生徒 96 人が小本を訪れ、被災地ガイドから東日本大震災の被害状況や災害への備えなどを学んだ。</p>
平成 25 年 10 月	
1 日	<p>・ 町立岩泉小学校 6 年生 33 人が小本地区を訪問。児童は写真で津波の凄まじさを確認。震災による漁業などへの影響も学んだ。</p>

たどり、町並みを作った。(小本仮設団地集会所、小本生活改善センター)

出来上がった模型と作業の様子が12月6日午後7時半からNHK総合テレビ「シリーズいわて 岩泉町小本地区」で放映された。

◆12月7日～9日

ふるさとの記憶

—いわて失われ

た街 模型復元プロジェクト展—。復元された町並みの模型が3日間展示された。(小本生活改善センター)



◆12月24日

小本小学校大牛内分校体育館で、小本中学校(小野佳保校長、

平成25年10月	
13日	・龍泉洞秋祭りが開催。小本浜漁協婦人部が小本の鮭で作ったつみれ汁を販売し、好調な売れ行きだった。
14日	・石垣・岩手かけはし交流協会から激励金が贈呈される。(乙茂)
17日	・町立小川中学校1年生24人が復興教育を学ぶために小本訪問。小本仮設住宅住民との交流会を開催。小川中学校生徒は「YOSAKOIソーラン」を披露。(小本仮設住宅集会所)
18日	・昭島市「昭和の森芸術文化振興会」からの寄付金贈呈式。(大会議室)
19日	・小泉進次郎復興大臣政務官が就任挨拶のため役場を訪問。伊達町長と意見交換(大会議室)
20日	・おもと青空市。あいにくの雨空だったが約600人が参加。鮭汁のおふるまいやさまざまな催しで集まった人たちは大いに楽しんだ。(小本支所前駐車場) ・アサヒグループホールディングス(株)から町に「おもと青空市に使ってほしい」として寄付金の贈呈。(小本支所前駐車場)
22日	・町からコココーラ教育・環境財団岩手支部に対し感謝状を贈呈。同財団では復興支援基金事業から3000万円を町に対し寄付した。
23日	・坂井学復興大臣政務官が就任挨拶のため役場を訪問。協議。(議員控室)
25日	・24年度から進めてきたぴーちゃんねっと事業(正式名称:岩泉町地域情報通信基盤整備事業)開通式典。関係者約70人が参加。(小本生活改善センター)
平成25年11月	
4日 ～10日	・「記憶の街ワークショップ」が開催された。(小本仮設団地集会所、小本生活改善センター)(本文参照)
8日	・復興応援コンサート「アンダーパス」によるミニコンサート開催。(大川小学校)
10日	・三陸ジオパークが日本ジオパークに認定されたことを記念して、三陸鉄道を舞台にジオの知識を競う「第1回三陸キッズ・ジオマスター」が開催。小本小から2人が参加した。

生徒47人)では、地域住民を招いてのクリスマス交流会を開催。生徒たちは、会食やマッサージ、クリスマススプレゼントなどで参加者を精一杯もてなした。

参加者は、生活衛生営業指導センターの協力のもと、生徒たちが用意した寿司などの昼食と心のこもったマッサージなどに感動した様子で、会場では「私を作るよりずっとおいしいお寿司だった」「いつまでもやっていて欲しいくらいマッサージが上手だね」などの声とともに、終始笑顔が絶えなかった。



平成 25 年 11 月		
14 日 ・ 15 日	<ul style="list-style-type: none"> 災害公営住宅小本団地の説明会を開催。小成、小本、岩泉の各仮設団地集会場にて 26 年 3 月完成予定の災害公営住宅について、地域整備課と復興課の職員から家賃の算定方法や入居条件などの説明を受けた。 	
22 日	<ul style="list-style-type: none"> 小本中学校の生徒が県中学校総合文化祭の舞台発表部門に出場。七野七頭舞を披露し最優秀賞を受賞。 復興応援チャリティコンサート開催。「ラ・ピアッツァ」の 4 人と岩泉町出身と盛岡市出身の 2 人が加わりオペラ公演。町内の児童、生徒らと町民約 300 人が迫力ある歌劇の世界を楽しんだ。(岩泉中学校) 	
24 日	<ul style="list-style-type: none"> 小川地区歳末たすけあい演奏会。小本地区の住民が招待され交流を通じ楽しい 1 日を過ごした。 	
平成 25 年 12 月		
12 月 上旬	<ul style="list-style-type: none"> 三陸鉄道小本駅では郷土芸能「中野七頭舞」をかたどったイルミネーションが町内の有志により飾りつけられた。 	
7 日 ～ 9 日	<ul style="list-style-type: none"> ふるさとの記憶—いわて失われた街 模型復元プロジェクト展—開催(本文参照) 	
8 日	<ul style="list-style-type: none"> 「だれでもフォトグラフィ」、講師と一緒に歩きながら指導を受ける撮影会も開催。 	
11 日	<ul style="list-style-type: none"> 大同生命保険から中小企業の震災からの復興のためにと町に寄付金が手渡される。 	
21 日	<ul style="list-style-type: none"> 七頭舞・七ツ舞発表会。小本小学校本校の児童による発表会。中野七頭舞、中島七ツ舞、中里七ツ舞、大牛内七ツ舞の 4 種の舞を堂々と披露した。(町民会館) 	
24 日	<ul style="list-style-type: none"> 小本浜漁業協同組合漁港施設等地鎮祭(小本漁港) 小本中学生が地域住民を真心のおもてなし～小本中でクリスマス交流会～小本地区の住民を招待し、中学生がマッサージと巻かずしなどをプレゼント。(小本小大牛内分校体育館)(本文参照) 	

資料

あの日から3年、復興に向けた歩みは
どこまで進んでいるのか？
これからの岩泉町を考える

復興事業計画 整備計画図



岩泉町震災復興計画の全体像

いくつかある復興プロセスは今、目に見える形で進んでいる。その主なものを紹介し、進捗状況についてまとめらる。

1. 災害公営住宅の建設
 - ・ 災害公営住宅森の越団地 完成（平成25年5月25日入居開始） 木造3棟 15戸
 - ・ 災害公営住宅小本団地（南中野地内） 建設中（平成26年3月完成予定） R C造1棟、木造4棟 36戸
2. 集団移転事業
 - ・ 小本小学校・中学校の建設 造成工事中（平成28年3月完成予定）
 - ・ 小本こども園（仮称）の建設 造成工事中（平成27年3月完成予定）
 - ・ 集団移転地（西工区、東工区）（平成27年3月完成予定）
3. 漁港・堤防の整備、がれき置場の状況
 - ・ 小本漁港復旧工事（平成27年3月完成予定）
 - ・ 導流堤・防波堤・河川堤防のかさあげなど（平成27年9月完成予定）
4. 三陸鉄道小本駅周辺の複合施設の建設（平成27年11月完成予定）
5. 平成25年度の復興予算について
6. 復興スケジュール

1 災害公営住宅の建設

災害公営住宅森の越団地

住民意向調査の結果を受けて、災害公営住宅・集団移転事業等の規模を策定した。

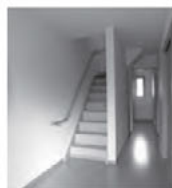
災害公営住宅森の越団地では平成25年5月に入居が開始し、新しい生活が始まっている。



災害公営住宅森の越団地



キッチン



階段



B棟



集会室

災害公営住宅小本団地

災害公営住宅小本団地では、入居者の生活利便性とコミュニティ形成に配慮して、三陸鉄道小本駅西側の隣接地に建設を決定。

25年2月から造成工事を開始し、6月に建設工事を発注。平成26年3月には工事が終了し、入居は平成26年4月頃の見込みである。



災害公営住宅小本団地配置図

計画戸数 5棟36戸

敷地面積 約6,900㎡

造成工事 平成25年2月～7月

建築工事 平成25年6月～26年3月

A棟：鉄筋コンクリート造2階建（床面積77.35㎡）・2LDK 16戸

B棟：木造2階長屋建（床面積76.18㎡）2LDK 4戸

C棟：木造2階長屋建（床面積79.50㎡）3LDK 4戸

D棟：木造2階長屋建（床面積76.18㎡）2LDK 6戸

E棟：木造2階長屋建（床面積76.18㎡）2LDK 6戸



工事中写真（A・B棟）



工事中写真（木造D・E棟）



工事中写真（E棟玄関付近）

（上4点はすべて平成25年12月撮影）



工事中写真（鉄筋コンクリート造A棟）

2 集団移転事業

小本駅周辺にコンパクトなまちづくり

小本地区では、三陸鉄道小本駅周辺に住宅や公共施設を集約したコンパクトで機能的なまちづくりを進めている。

集団移転地として、小本駅周辺に用地が確保され、一緒に小本小学校・小本中学校及び小本こども園（仮称）の建設が決定した。小本小学校・小本中学校・こども園（仮称）の造成工事は平成25年7月から始まっており、3月には造成工事が終了する予定。



小本駅周辺の復興事業

平成25年8月復興かわら版第15号より

集団移転地区（平成27年3月完了予定）

東工区 0.5ヘクタール

西工区 1.9ヘクタール（平成27年3月完了予定）

小本小学校・小本中学校及び西工区集団移転地

盛土面積 6.3ヘクタール

西工区集団移転地 2.4ヘクタール

小本小学校・小本中学校 3.6ヘクタール

小本こども園（仮称） 0.3ヘクタール

盛土数量 約10万立方メートル

工事期間 平成25年7月29日から平成26年3月31日まで

小本小学校・
小本中学校
移転地



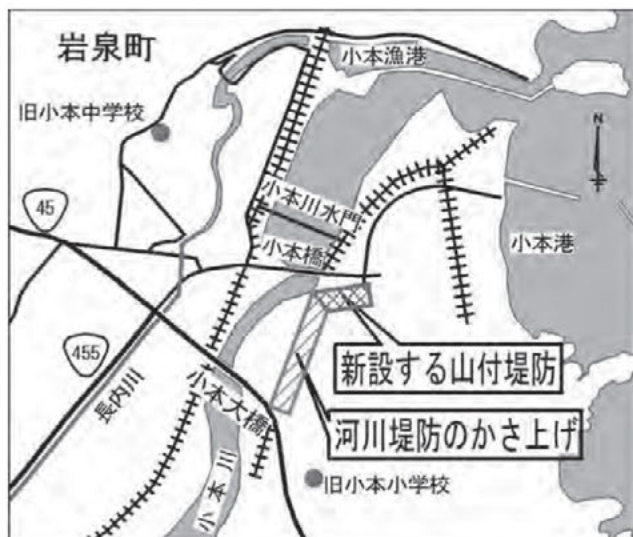
小本こども園（仮称）完成イメージ図



小本駅から見た集団移転地（西工区）（平成25年12月撮影）

3 漁港・堤防の整備とがれきの処理状況など

河川堤防のかさ上げ、山付堤防など、土木工事も進んでいる。導流堤の復旧工事は消波ブロックの据付も含めて終了している。農地の災害復旧工事も全て完了。震災がれき置場も整理されつつある。



発注された河川堤防のかさ上げ工事(小本川右岸の小本大橋より下流)と山付堤防工事
平成25年8月復興かわら版第15号より



河川堤防のかさ上げ工事(小本川右岸)(平成26年1月撮影※)



新設する山付堤防工事(平成26年1月撮影※)



導流堤復旧工事(平成25年9月撮影)



避難路工事(平成25年12月撮影)

*写真は県提供

4 小本津波防災避難施設の建設

観光センターが、小本津波防災避難施設を兼ねた複合施設として建替えられる。津波災害時には400人が避難できる集会室を備え、町役場小本支所や診療所も入る。

施設は鉄筋コンクリート3階建て（延べ床面積2,122.2㎡）で、現在の観光センターを取り壊した跡地に建てる。自家発電装置を完備。避難所にもなる集会室を3階に設置し、飲料水や非常食、毛布などを備蓄。1階には三陸鉄道の切符売り場や売店、役場支所が入り、2階は診療所と津波資料室となる。

平成25年12月現在入札準備中。入札が終わり次第、新駅舎を着工、平成27年11月の完成予定。事業費は約10億円、一部は復興交付金を活用する。



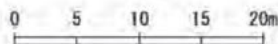
小本津波防災避難施設
1階平面図



2階平面図



3階平面図





小本津波防災避難施設パース案

復旧・復興予算は約 58 億 8000 万円

町の 25 年度一般会計当初予算は、総額 149 億 2500 万円。前年度当初予算と比較して 52 億 6300 万円の増（54.5%増）。

復旧・復興事業が本格的に動き出したことに伴い、関連予算も約 58 億 8000 万円と、前年当初予算額の約 17 億円から大きく増えた。

主な事業の概要は

- 集団移転地造成工事 2 億 9,992 万円
25 年度は詳細な設計を実施して造成工事に着手する。
- 災害公営住宅小本団地建築工事 6 億 160 万円
造成工事と建築設計が進行中。25 年度に計 36 戸の公営住宅を建築。
- 小本小・小本中学校敷地造成工事 3 億 9,853 万円
地質調査と造成設計を実施中。25 年度は敷地の造成工事に着手。
1 次造成工事は平成 25 年度中に修了する予定
- 小本こども園(仮称)敷地造成工事 1,575 万円
1 次造成工事は平成 25 年度中に修了する予定。
- 小本地区復興排水施設設計委託料 1,570 万円
被災した小本地区の排水対策を行う事業。施設を整備するための設計を行う。
- 小本津波防災避難施設建築工事 9 億 1,526 万円
小本駅前の小本観光センターを解体し、あらたに「防災避難施設」「小本支所」「観光センター」「診療所」を備えた複合施設を建設。25 年度は建築の設計を進める。
- 小本駅エレベータ設置事業補助金 6,850 万円
小本駅ホームにエレベータを整備してバリアフリー化を図る。
- 災害廃棄物処理委託料 27 億 7,413 万円
震災に伴う災害廃棄物の処理を県に委託。廃棄物処理は平成 25 年度中に終了する予定。

6 復興スケジュール

分野区分	細分項目等	事業主体	路線・箇所名等	事業概要	年度別整備スケジュール									
					第1期(基盤復興期間)			第2期(本格復興期間)				第3期(さらなる展開への連結期間)		
					H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30		
海岸保全施設	一般海岸	県	1 小本川	(三陸高潮)防湖堤 L=0.2km	施工準備		工事							
			2 小本海岸	(災害復旧)防湖堤 L=0.3km	施工準備	☆工事	■H25.3完成							
	漁港海岸	町	3 茂師漁港	(災害復旧)防湖堤 L=0.1km 水門 N=1基 他	施工準備		工事							
			4 小本漁港	(災害復旧)防湖堤 L=0.2km 水門 N=1基 他	応急対策	施工準備	☆工事	■H25.3完成						
復興道路等	復興道路	国	A 三陸沿岸道路	田老～若泉	H23 事業新規)準備		◆H25.3.27 起工式			用地・工事の推進(逐次供用開始)				
	復興支援道路	県	B(主)久慈岩泉線道路	龍泉洞	用地・工事の推進(逐次供用開始)		■H25.8.28 完供給開始							
復興まちづくり	漁業集落防災機能強化	町	a 小本地区	集落道、用地造成他 対象戸数:60戸 (民60戸)	事業準備		設計・用地等		[民60戸] 工事					
					災害公営住宅	町	ア森の越	木造 予定戸数:15戸	設計	★工事	[15戸]			
漁港	漁港	県	① 茂師漁港	(漁港災害)防湖堤 L=493m 岸壁 L=280m 他	施工準備	応急対策		★工事						
			町	② 小本漁港	(漁港災害)防湖堤 L=103m 岸壁 L=844m 他	施工準備	応急対策		★工事					
港湾	小本港	県	小本浜地区	(港湾災害復旧)防湖堤 L=871m 岸壁 L=119m 物揚場 L=105m 他	施工準備	★工事								
医療	医科診療所	町	小本診療所	診療所施設整備	設計		工事							
教育	小本こども園(仮称)	町	1 小本こども園(仮称)	新築	造成工事		設計		園舎建築工事					
	小学校		(災害復旧)移転	事業準備・住民合意		用地取得・設計	造成工事		[移転完了まで仮設校舎を使用]					
	中学校		(災害復旧)移転	事業準備・住民合意		用地取得・設計	造成工事		[移転完了まで仮設校舎を使用]					

※ 事業の実施箇所や実施内容、整備スケジュールは、今後、変更する可能性があります。

※ 復興まちづくりの「民」は自立再建等の宅地数、「公」は災害公営住宅の戸数です。

おわりに 明日の岩泉へ その2

東日本大震災からほぼ3年の歳月が流れた。岩泉町に限らず、全被災地の苦闘が続く一方で、25年に日本を襲った相次ぐ大規模自然災害の影響もあり、復興の現況は、なかなか全国に伝えることができにくい。復興の途上のまちの表情、その課題や解決の知恵などを全国に向け発信するとともに、未来の町民に向けても伝えていきたいと考え、「復興記録その2」として、本書を発行することにした。

資材不足や人手不足、技術不足などの困難に直面しながらもそれを乗り越え、町でも災害公営住宅の建設、一部入居、集団移転地の造成、避難路や防災施設など、復興計画の実現が着実に進んでいる。

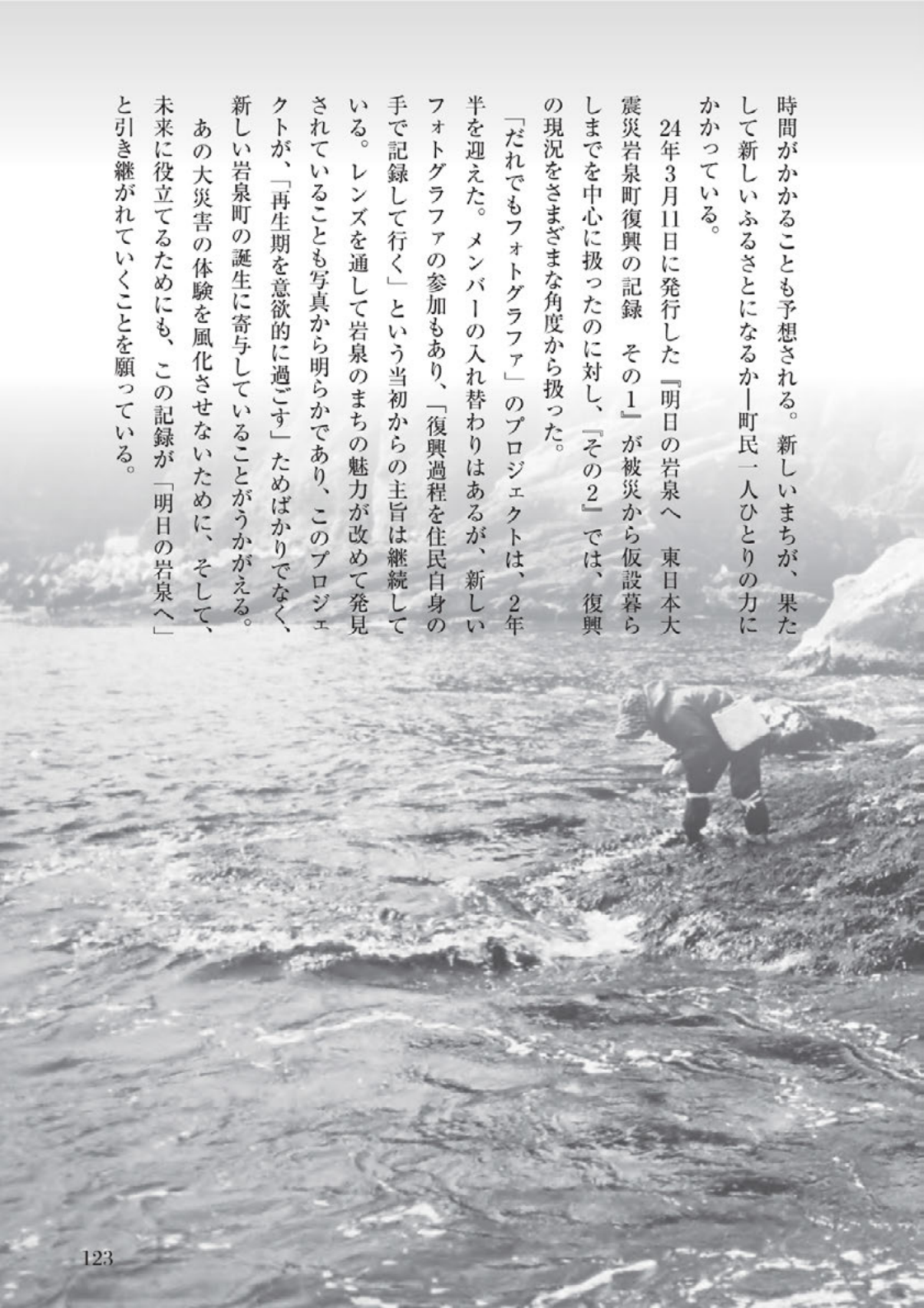
こうした復興のプロセスの中で、長い時間をかけて培ってきた地縁関係をそのままには保てないこともあって、コミュニティの再構築は大きな課題であり、

時間がかかることも予想される。新しいまちが、果たして新しいふるさとになるか―町民一人ひとりの力にかかっている。

24年3月11日に発行した『明日の岩泉へ 東日本大震災岩泉町復興の記録 その1』が被災から仮設暮らしまでを中心に扱ったのに対し、『その2』では、復興の現況をさまざまな角度から扱った。

「だれでもフォトグラフィ」のプロジェクトは、2年半を迎えた。メンバーの入れ替わりはあるが、新しいフォトグラフィの参加もあり、「復興過程を住民自身の手で記録して行く」という当初からの主旨は継続している。レンズを通して岩泉のまちの魅力が改めて発見されていることも写真から明らかであり、このプロジェクトが、「再生期を意欲的に過ごす」ためばかりでなく、新しい岩泉町の誕生に寄与していることがうかがえる。

あの大災害の体験を風化させないために、そして、未来に役立てるためにも、この記録が「明日の岩泉へ」と引き継がれていくことを願っている。



協力者一覧—— ありがとうございます!

◆インタビュー等協力

阿部孝四郎	箱石千鶴子	岩手県立宮古病院
金澤郁子	三浦純	社会福祉法人恩賜財団済生会岩泉病院
上下純一	八重樫義一郎	岩泉商工会
工藤リセ	八重樫康	小本浜漁業協同組合
名郷根光子	八重樫芳令	株式会社岩泉総合観光（龍泉洞温泉ホテル）
箱石公治		

◆「だれでもフォトグラフア」協力

阿部恵子	金澤玲奈	田中道雄	箱石芙蓉子	山口有稀音
阿部大夢	上下純一	田村八代江	三浦トシ子	和野浩也
阿部大海	工藤良雄	田村美夏	三浦なおみ	
阿部範子	熊谷貴里子	田村千美	三浦悦子	橋本照嵩
石黒太一	小成智子	田村美智	三浦淳一	八重樫定津彰（精岩堂）
石黒千夏	佐々木愛香	長崎基一	三浦義治	富士フィルム株式会社
織笠清	佐々木悦子	中村昭	三浦義昭	UIFA JAPON
加藤勝彦	佐々木一幸	野崎淳志	三浦幸美	
金澤清香	佐々木秀明	箱石チカ子	三浦浩子	
金澤千鶴子	佐藤憲二	箱石京子	三浦登紀子	
金澤卓也	鈴木孝徳	箱石昌彦	三浦忍一郎	

◆写真協力

岩手県
平野正秀
株式会社生活構造研究所

敬称略・五十音順

明日の岩泉へ 東日本大震災 岩泉町復興の記録 その2

発行日 平成 26 年 3 月 11 日

発行 岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉字惣畑 59-5 電話：0194-22-2111

編集 株式会社生活構造研究所

東京都千代田区麹町 2-5-4 第 2 押田ビル 電話：03-5275-7861

協力 UIFA JAPON（国際女性建築家会議日本支部）

レイアウト 朝倉恵美子